

「修学旅行」のあり方を考える

～中央大学附属中学校7期生の実践を通して～

川 北 慧・頓 野 綾 子

〈キーワード〉 沖縄 構造的差別 教育 平和 アクティブラーニング

序章 「修学旅行」のあり方を問い直す

中央大学附属中学校は開学以来、一貫して修学旅行先を沖縄県に定めたうえで「南国の楽園」としての沖縄だけでなく、沖縄が抱える負の側面にも注目し、現在の日本が抱える課題について生徒自身が考えることができるプログラムを策定してきた。

中学7期生の修学旅行に関しては、現在も沖縄研究を続けているものの、生徒を引率する立場からの立案は初となる川北と、今回が3回目の立案となる頓野が担当者となった。修学旅行に関する事前学習や事後学習のやり方、見学地等は当該学年教諭の裁量で自由に決めることが可能¹となっているが、いわゆる物見遊山の観光ではなく、現地で生徒が「修学」したうえでその成果を発表することができるための旅行²にすべく、新たに「出会い」をコンセプトとして立案を行った。まず生徒たちは、事前学習の班分けを通じて仲間たちと「出会い」、協力して作業を行うこととなる。さらに班ごとに与えられた自然、文化、風習、琉球史、沖縄戦、本土復帰前の沖縄、基地問題をはじめとした現代の沖縄などのこれまで意識してこなかった様々な問題と「出会い」、班ごとに発表することとなる（写真1・2）。こうしてひとまず沖縄に関する「大きな物語」³に出会わせたいうえで、本校に在職するさまざまな教員

¹ 高橋（2010）は、沖縄修学旅行における問題点として、ガマに千羽鶴を供えるという「本土」の鎮魂作法の押しつけに象徴的にみられる沖縄に対する意識の低さ、沖縄をつねに国民の物語に回収する構造的矛盾、オリエンタリスティックな視線、観光商品化に伴う沖縄像の構築・消費、ホスト側における被写体イメージの内面化・身体化などを指摘している。こうした問題が顕在化していることに関して、本校では事前学習において本校国語科教諭の矢野が「沖縄と観光：わたしたちはなぜ修学旅行に行くのか」と題して事前学習を行った。また高橋（2017）は、本校事前学習でも補助教材として配布している朝日新聞社発行の「知る沖縄戦」が2014年に「一面的な思想に基づく内容」として国会で取り上げられたことをふまえ、沖縄戦学習に多面性が必要であり、それらをふまえたうえで教師は専門的裁量によって「有益適切」な判断を行っている現状について紹介している。

² なお2018年度より5年間、中央大学附属高校は文科省のSSH（スーパーサイエンスハイスクール）に採択された。高校においては、教養総合Ⅰにおいて海外、国内における1週間程度の実地調査やそれをふまえたレポート作成・発表を生徒全員に課することを考えると、附属中学校においてもこうした観点からの修学旅行立案は今後必須になると考えられる。

³ 本論文中の「大きな物語」という表現は、いうまでもなくリオタールが『ポストモダンの条件』で用いた「乱立する様々な思想・知識・智恵・習俗などを自らの思想のもとに統合することを目的とし、普遍的な人類の歴史をつくることを目指すもの」として用いている。

の講義を受けて、より専門的な研究分野や研究者としての教員と「出会う」こととなる。さらに修学旅行における沖縄戦体験者や大学生、基地周辺で暮らす人々とのナラティブな語りを通じた「小さな物語」との「出会い」を受け、最終的に事後学習での論文執筆を通して、生徒たちは新たな自己と「出会う」こととなる。

今回は、「構造的沖縄差別」（新崎 2016 など）に関して、生徒自身が問い続けることができるようプログラムを立案した。いうまでもなく、沖縄はアジア太平洋戦争において本土防衛の「捨て石」となり、地上戦において県民の4人に1人が人命を失うという悲惨な経験をした地である。こうした点からも、沖縄戦による犠牲は本土の戦争犠牲とは全く質の異なるものであったといえよう。しかしながら、戦後日本は沖縄を米軍支配に追いやり、現在も米軍専用施設の約70%を沖縄に押しつけている。これに派生して性犯罪や貧困問題が起こる中、多くの県民は沖縄に犠牲を強いる日本政府の政策ないし本土の人々の無関心さに不満を持っている。こうした現状をふまえ、今回の修学旅行では「沖縄戦」「基地問題」「環境問題」などと区分するのではなく、これらがつながっており、複雑に絡み合ったうえで現在の沖縄があることを生徒一人ひとりが意識したうえで、事後学習において各々が興味・関心を持ったことに関して学びを深めることができるようプログラムを策定した。

これらをふまえ、次章以降では中央大学附属中学校7期生の修学旅行を通じた実践について報告を行う。なお、本章と第1章、第5章に関しては川北が、第2章と第3章、第4章に関しては頓野が執筆を担当した。共著論文となった都合上、内容が重複する部分もあるが、それぞれの修学旅行に対する思いや問題意識を尊重するために、編集は最小限にしたことをあらかじめ述べておく。

(川北)

第1章 現地での行程・見学地の策定

序章で述べたコンセプトをふまえ、現地での行程を立案するべく、実施前年度の3学期末に生徒へのアンケートを行った。それによると、すでに家族旅行等で沖縄に行ったことがある生徒は半分を超えており、行ったことがある場所については、首里城、国際通り、美ら海水族館などがあげられた。その一方で、平和の礎やひめゆり平和祈念資料館、安保の見える丘に行ったことがある生徒は10名に満たず、いわゆる観光地やリゾートとしての沖縄に行ったことはあるが、南部戦跡をはじめとした沖縄が抱える負の側面は見たことがない生徒が多いことを認識した。しかしながら、いわゆる「平和教育」のメッカとして戦跡を「消費」し、「戦争は悲惨だと思いました」「平和は大切だと思いました」といったありきたりな感想を持たせたうえで、生徒の「傷心」を癒すべく海やリゾートを満喫させる「定番コース」では沖

2018年度 第3学年沖縄修学旅行 行程（「修学旅行のしおり」より）

※太字は見学地・または体験学習、講演など

	10月26日(金)	10月27日(土)	10月28日(日)	10月29日(月)
9:00	羽田空港第1ターミナルビル 「太陽の塔」前集合	8:00 宿舎発5・6組 8:20 宿舎発1・2・4組 8:50 宿舎発3組	8:30 宿舎発	7:50 宿舎発
10:00		◆1・2組 (糸数壕→ひめゆり平和祈念資料館→屋敷(優美堂)→荒崎海岸→沖縄県平和祈念資料館)	◆1・2・3組 シーカヤック・ビーチコーミング体験→屋敷→ジュゴンの見える丘散策→辺野古浜見学(現地の住民からのお話)	佐喜真美術館見学 ◆佐喜真館長よりお話
11:00	羽田空港発 JAL909便 (機内にて昼食)	◆3組 (糸数壕→ひめゆり平和祈念資料館→屋敷(優美堂)→荒崎海岸→沖縄県平和祈念資料館)		沖縄国際大学 ◆佐藤教授より講義 ◆米軍ヘリ墜落現場および大学屋上より普天間基地を臨む
12:00		◆4組 (ひめゆり平和祈念資料館→糸数壕→優美堂(昼食)→荒崎海岸→沖縄県平和祈念資料館)	◆4・5・6組 辺野古浜見学(現地の住民からのお話)→ジュゴンの見える丘散策→屋敷→シーカヤック体験・ビーチコーミング体験	昼食(お弁当手配。大学内大教室にて)
13:00		◆5・6組 (荒崎海岸→糸数壕→優美堂(昼食)→ひめゆり平和祈念資料館→沖縄県平和祈念資料館)	※昼食は「じゅごんの里」にてお弁当を手配	那覇空港着
14:00	那覇空港着			那覇空港発 JAL910便
15:00	平和の礎 見学 (沖縄県観光ボランティアガイド友の会同行)			
16:00	摩文仁の丘→都道府県の碑見学 健児之塔見学			
17:00	宿舎着	宿舎着	ふれあい体験学習センター	羽田空港着
18:00	夕食	夕食	エイサー体験・演舞 沖縄料理	解散
19:00				
20:00	玉木利枝子さんによる平和講話	平和学習(がちゅん)	宿舎着	
21:00				
22:00	就寝	就寝	就寝	

縄を「修学」するための旅行として不十分であるといえよう。本章では、沖縄戦とはどのような戦争であったか、その本質に迫らせたうえで、現在も続く「構造的沖縄差別」について生徒が考え続けることができるような行程をどのように開発したか、明らかにする。

第1節 1日目の行程の策定

1日目は11時に羽田空港を出発し、14時に那覇空港へ到着する飛行機が1年前から予約されている。そのため、1日目に自由に動き回ることができる時間は3時間ほどしかない。例年は初日に首里城を見学することが多かったが、半数を超える生徒が家族旅行等で訪れたことのある場所であるため、今回は見学地から外すこととした。また、例年お世話になっている沖縄県観光ボランティアガイド友の会の2日目の予約がすでに埋まっていたために、初日から南部戦跡をまわることにした。しかし移動時間を考慮すると、2時間で沖縄県立平和祈念資料館と平和の礎を見学するにはあまりにも短すぎるため、この日は平和の礎をじっくりとまわった後、摩文仁の丘に建つ各都道府県の碑を通り、沖縄戦において第三十二軍を指揮した牛島満自決の地に建つ「黎明之塔」を経て、鉄血勤皇隊として動員させられた沖縄師範学校の生徒の慰霊碑である「健児之塔」までを歩きながら、沖縄戦がどのような戦争であったのか考えさせるコースを策定した。さらに、那覇市内のホテルに戻った後、沖縄戦体験者である玉木利枝子さん（84歳）の講話を聞くことによって、沖縄戦の実情について直接学ぶ機会を設けた。

本校においては、これまで沖縄県平和祈念資料館とあわせて平和の礎を訪れていたが、時間が足りなくなることが多かった。今回平和祈念資料館と平和の礎をあえて切り離したねらいとしては、平和の礎をじっくりとまわることによって、一人ひとりの「小さな物語」と向き合わせる時間を増やすことにある。いうまでもなく、平和の礎は国籍や軍人、非軍人に関係なく沖縄戦で亡くなったすべての人の名前を刻印するという理念のもとつくられたものであるが、ここにおいては「24万人が亡くなった沖縄戦という1つの戦争（240,000×1）」というとらえ方ではなく、「一人ひとりの人生が24万人も失われた殺人事件（1×240,000）」という認識をまず生徒に持たせることにした。このように平和の礎を最初の見学地に組み込むことによって、沖縄戦を抽象的で漠然とした存在としてではなく、「小さな物語」の積み重ねとしてとらえさせることができる。こうした視点から物事を考えることは、沖縄戦のみならず、沖縄をめぐる様々な問題を考える際に必要となる視点であり、事前学習において「大きな物語」を学んできた生徒にとって、思考の転換を迫られる契機となる（写真3）。

また今回は、平和の礎と対比的な存在であり、かつて岡本（2006）が「グロテスク・デザインのコנקール」と揶揄したうえで批判した31の府県の慰霊碑が並ぶ摩文仁の丘を歩かせることとした。かつて艦砲射撃によって真っ白な岩肌を晒していたこの丘は、60年代か

ら「各都道府県対抗の慰霊碑のコンクール会場」として「開発」され、戦後日本において最大級の慰霊空間として整備された場所である。北村（2009）は、この「霊域ゾーン」を「戦死者の『犠牲』と戦後日本の『平和と繁栄』を因果律で結ぶ物語が作られる場」としたうえで、高度経済成長の中、軍属の「日本人」の戦死者が、生者によって国民的聖域へと植民させられ、この地が靖国化されていく過程を明らかにしている。ここまでの視点を生徒に持たせることは難しいかもしれないが、平和の礎を見学した後に「高度経済成長の記憶」として観光地化された「霊域ゾーン」を歩くことによって、何らかの「違和感」を生じさせることができると考え、ここも歩かせることにした。

都道府県の碑を抜けると、摩文仁の丘の最も高い地点である「黎明之塔」（揮毫は吉田茂による）にたどり着く。ここは沖縄戦において沖縄守備軍司令官であった牛島満が自決した地である。牛島は最期に「各部隊は各地における生存者中の上級者之を指揮し、最後迄敢闘し悠久の大義に生くべし」という軍命を出すことがこのガマ（自然洞窟）は、艦砲射撃を防ぐことができる場所にあり、かつ戦場を一眼に見下ろすことのできる「一等地」に位置することがわかる。このように南部に避難してきた多くの住民がないがしろにされ、沖縄戦において軍が最も良い場所を占領した地に立つことによって、沖縄戦において明らかになった「軍隊は住民を守らない」という事実を体感することができる。さらに県民への配慮がほとんど見られない慰霊碑の碑文を分析することにより、「慰霊」という言葉によって住民の非業の死さえ殉国美談に仕立て上げられてしまう危険性についても考えることができる⁴。

「黎明之塔」から「健児之塔」までは、人一人がようやくすれ違うことができる狭くて急な崖となる。この崖を沖縄戦当時、法的根拠なく動員された13～16歳の沖縄師範学校の生徒たちは、鉄血勤皇隊として「一等地」の山頂にある司令本部に向かって登り、伝令や通信を行った。伝令を行うときは同じ文章を3人に持たせ、その1名のみがたどり着くことができたという激戦地である。現在もアダンの森が広がるこの地は、鉄血勤皇隊のみならず多数の敗残兵や避難民が命を落とした場所であり、戦後は風洞となった頭蓋骨の中を海風が通り抜けるときに「ヒューヒュー」と口笛のような音が鳴り響く地であったことを北村（2009）が聞き取りによって明らかにしている。中学7期生は国語の授業において目取真俊『風音』を扱っているが、うっそうと茂るアダンの森を歩きながら、生徒たちは『風音』に登場する

⁴ 大田（2006）は、黎明之塔が東京と地元の一部権力者によって建立されたことをふまえ、こうした地元の権力者が「戦前は、政府の画一的皇民化政策に追従して沖縄文化を抹殺することに狂奔したのみか、沖縄戦では軍部の言いなりになって県内の若人たちを死地に追いやり、自らは敵上陸を目前にしながら真っ先に本土に脱出」し、戦後は「戦争で働き手を亡くし、弱い立場に立たされた遺家族に見舞金や年金などの話を持ちかけ、あたかもお金で『魂』を買い取るかのように操ってきた」ばかりか、「『国が責任を以て死者たちを靖国神社に護持せよ』と主張する」など「自らが戦前から戦時中にかけて犯したもろもろの悪業に対する反省もないまま、口ではおうむがえしに『平和』を唱えながら、実際にはまたもや中央の政治権力と結託して軍事力の強化を図っている」と述べ、こうした慰霊のあり方を厳しく批判している。

銃弾が貫通した穴を風が抜けるときに音が鳴る頭蓋骨「泣き御頭」^{うんかみ}が、単なる「小説的想像力の産物」ではないことを実感することとなる。

崖を下りきると、鉄血勤皇隊が自決したガマの後ろに「健児之塔」の慰霊碑が建立されている地点までたどりつく。鉄血勤皇隊は1945年6月23日の解散命令によって、急造爆雷(箱に火薬を詰めた爆弾)を背負って切り込みや特攻を行うこととなり、900名近くの戦死者を出すことになった。あまり知られていないものの、戦死者の数で比較すると、同じく法的根拠なく動員させられ、240名の戦死者を出したひめゆり学徒隊よりも鉄血勤皇隊のほうが戦死者は多い。こうした中、映画『ひめゆりの塔』をはじめとした「純潔の身を祖国に殉じる」ことによって「散華」した「汚れなき少女たち」として戦後描かれたひめゆり学徒隊と、ほとんど注目されることのない鉄血勤皇隊をジェンダーの視点から比較することによって、こうした物語が本土による日本人が見たい「物語」として創られていく過程に関しても考察することができる⁵ (写真4)。

このように様々な視点から沖縄戦を体感したうえで、那覇市内に戻り玉木利枝子さん(84歳)の講話を聞くことになる。玉木さんは、沖縄戦において家族、親戚、友人を目の前で亡くす中、九死に一生を得ており、高齢となった現在も平和講話を続けられている⁶ (写真5)。

このように1日目は、「大きな物語」として沖縄戦をとらえるのではなく、沖縄戦当時の一人ひとりの生き方に思いを馳せつつ、戦後沖縄の戦跡がどのように弔われ、記憶され、語られてきたか、翌日以降も様々な観点から考えることができるように行程を組んだ。

第2節 2日目の行程の策定

2日目はひめゆり学徒隊に焦点をあてたうえで、彼女たちの歩いた道をたどりつつ、沖縄戦と現在の沖縄が抱えるさまざまな問題を接合することのできるプログラムを組むことにした。クラスによって順番は異なるが、少人数で動くことができるよう、午前中はアブチラガマ、ひめゆり平和祈念資料館、荒崎海岸を順にまわった後、午後に沖縄県平和祈念資料館と平和の礎を自由に見学させることとした。その後ホテルに向かい、夕食後に生徒たちが2日間で感じたことをアウトプットすることができる機会を設けた。

アブチラガマは、元々糸数集落の指定避難壕であったが、日本軍の陣地壕として使われるようになり、米軍上陸後の1945年5月1日には南風原陸軍病院の糸数分室^{はえぼろ}となった際に、ひめゆり学徒隊14名が派遣されたガマである。全長270mのガマの中は600人以上の負傷

⁵ 吉田(1993)は、ひめゆりの物語が「戦後日本の偽善的な平和思想」と「沖縄の恥部」が接合したことによって生まれたとしたうえで、ひめゆりの物語が「忠臣蔵」のような定番悲劇として語られる危険性について指摘している。

⁶ 玉木利枝さんは、本校4期生の修学旅行以来一貫して講話を引き受けてくださっている。玉木さんの沖縄戦体験に関しては、『少女十歳の戦争体験』(自費出版)に詳細に記されている。

兵で埋めつくされ、ひめゆり学徒隊は手術の介助や食料の配布（ピンポン玉ほどのおにぎり）などを行った。撤退命令が出た5月25日には重症患者である脳症患者や破傷風患者などは闇の中に置き去りにされ、ひめゆり学徒隊は現在のひめゆり平和祈念資料館がある第一外科壕まで撤退することとなった。その後アブチラガマは、住民と生き残りの負傷兵、監視するための日本兵が雑居することとなる。このようにアブチラガマは、様々な視点から当時の人々の生活について考えることができるガマである⁷（写真7）。

ひめゆり平和祈念資料館は、バスケットボール部の活動や美人コンテストなど、現代を生きる生徒たちと同じような明るい青春がひめゆりの少女たちにもあったことを示す「ひめゆりの青春」、生徒たちが戦場に携えていった品々をもとにひめゆり学徒隊の実態について理解を深める「ひめゆりの戦場」、6月18日の夜に出された「解散命令」によって米軍が包囲する戦場に放り出された生徒たちがどのような行動をとったのか、映像による証言が流れる「解散命令と死の彷徨」、240名の遺影と文字による証言が置かれている「鎮魂」などの展示室に分けられているが、どこにポイントを置いて見学をするかは、すでに「小さな物語」と向き合う姿勢が十分にできているであろう生徒自身の関心に委ねることとした。

しかし、沖縄戦と「向き合う」だけではなく、「伝えていく」ことも生徒一人ひとりが「平和で民主的な国家・社会の形成者」（教育基本法）となるために必要不可欠なことであるといえよう。折しも下見に行った2018年3月末を以て、長年ひめゆり平和祈念資料館の館長をされていた島袋淑子さん（90歳）が退任された。こうした「沖縄戦をどのように伝えることができるか」という問題⁸をふまえたうえで見学地に策定したのが荒崎海岸である。

荒崎海岸は、解散命令が出されたのちにひめゆり学徒隊が彷徨った「ひめゆり学徒最期の地」であり、生徒10名と生徒を引率していた教頭先生によって手榴弾による集団自決が行われた地でもある。しかしながら、その跡地には「ひめゆり学徒散華の跡」という小さな石碑が建っているだけで、このような事実や石碑の所在地に関しては観光マップ等にはほとんど載っていない。また海岸に下りるには、舗装されていないサトウキビ畑の中の道を20分ほど歩く必要がある⁹。こうした中、沖縄県内のいたるところに「小さな物語」があることを体感させたいと、これらをどのように伝えていくことができるか、生徒一人ひとりに考えさせる場所として荒崎海岸は最適な地であると考え、今回のコースに組み込んだ。ただし

⁷ ガマにおいて懐中電灯を消す「暗闇体験」は当時の様子を体感するとともに、戦死者への想像力を喚起させる装置ともいえる。また本間（2010）は、暗闇体験が子どもたちの自主・自立性に大きな影響を与えることを明らかにしている。

⁸ ひめゆり平和祈念資料館の学芸員である古賀（2018）は、こうした問題に対してアンネ・フランク・ハウスの教育的な映像制作ワークショップを取り入れた実践を行っている。これは、参加者の自主性を尊重しつつ、モニュメントに焦点をあてながら、そこに何があったのかという「過去」だけでなく、それが「現在」どのように語られており、今後どうなるのかという「未来」まで考えさせつつ、そのモニュメントについて紹介する映像を制作させるワークショップである。こうした実践を通して、若者たちは自分でも気づかないうちに歴史を伝える側に立つこととなる。

荒崎海岸に関しては、沖縄県観光ボランティアガイド友の会の帯同が他校の先約のため不可能であったため、筆者が解説することとなった。以下、どのような点に重点をおいたうえで解説や発問を行うことにしたか、実践例を載せておく。

まずこの地がどのような場所であるか簡潔に説明したうえで、五感を使って当時のことを想起させるために、次のような発問を行うことにした。「視覚—海から艦砲射撃が行われ、空からは機銃掃射が行われ、陸からは米軍が迫っていた、当時の人々は何をみたのだろうか」「聴覚—現在も聞こえる波の音は73年前も同じように聞こえたのだろうか、戦場ではどのような音がしたのだろうか」「触覚—尖った琉球石灰岩でできたこの海岸を裸足で走るとどうなるだろうか（時間が許す場合には、実際に裸足で歩かせてみる）、当時の海岸は足の踏み場もないほど遺体が横たわっていた、その遺体を踏んだ感触はどのようなものだったのだろうか」「嗅覚—そのような場所はどのようなにおいがしたのだろうか」「味覚—石灰岩のくぼみにたまった血や糞尿で汚れた水はどのような味がしたのだろうか」。

これらの発問の後に、ひめゆり学徒隊の生存者である宮城喜久子さんの証言をもとに、当時岩陰に隠れていた宮城さんに対し、米兵が「デテコイ、デテコイ」と投降を呼びかけていたことを紹介したうえで「もしあなたが、避難していた住民だったら、ひめゆり学徒だったら、日本兵だったらどのようにするか」という発問を行い、さまざまな立場から共感共苦（コンパッション）させることとした。これはフォルジュ（2000）がアウシュヴィッツを教える際、教育実践として提唱した手法である。フォルジュは住民体験記録を読み解く際に、正確な歴史的事実だけでなく、同時に歴史の犠牲者たちの苦悩を想像し、その苦しみを感じ取ることでできる力、いわば「心情の知性」である共感共苦を生徒の心に育まなければならないと述べている。このような「他人の苦悩を想像する力」を育むため、竹内（2011）は、日本兵にされた人々を題材に、「なぜ加害者となってしまうのか」を考えさせ、追及させる実践を通して共感共苦が重要であることを指摘している。さらに歴史を「自分事」としてとらえさせ「もしあなただったら」という反実仮想の問いによって生徒を揺さぶることにより、平和な歴史をつくる主体の形成につながる可能性について検討を行っている。これらをふまえ、当日はこうした発問の後に、両手をあげて投降していく日本兵を後ろから撃つ日本兵がいたことについても触れ、戦争や軍隊というものが生み出す暴力性について共感共苦させつつ、それらが生み出される「構造」まで考えを深めさせることができるよう工夫した。さらに最後に「どのようにすれば、こうしたできごとを伝えていくことができるだろうか」という発問を行い、体感したことをどのように「伝える」ことが可能かという点まで生徒一人ひとりに考えさせ

⁹ 荒崎海岸の入口にはバスで行くことができないため、「糸豊環境美化センター」の前にバスを駐車して歩いていくこととなる。なお、筆者は荒崎海岸において宮城喜久子さんが長年この地に行くことができず、証言することもできなかったが、十数年ぶりに訪れたこの地が「チリ捨て場」になっていたことにショックを受け、証言することに決めたというエピソードを紹介した。

ることにした（写真8）。

沖縄県立平和祈念資料館の見学に関しては、自由見学とすることにした。また、多くの「小さな物語」と「出会う」ことができた生徒自身が、改めて平和の礎を散策したり、2日間をふりかえりながら「もの思うこと」ができるよう、見学時間をあえて長くとることにした。

この後に生徒が向かう宿泊先であるムーンビーチは、復帰後に行われた沖縄海洋博覧会の際につくられたものである。多田（2004）は、この海洋博が政治的な祝祭として行われ、観光リゾートとしての「沖縄イメージ」を誕生させる契機となったことを明らかにしたうえで、こうした「沖縄イメージ」が亜熱帯を演出する装置として、復帰後再帰的にどのように用いられ、沖縄がどのように「開発」されていったか分析している。南国ムード漂うリゾートホテルに入った生徒は、こうした「違和感」を感じつつ、このような「違和感」がどこから生じてくるものなのか、考えることとなる¹⁰。

このように2日間を通して、生徒たちは多くの証言、写真、映像と「出会う」こととなる。しかしながら、インプットする情報量の多さや、現地で幾度となく問われる「答えのない問い」を前に、生徒たちは必然的に「消化不良」をおこすこととなる。こうしたもやもやした状態から解き放ち、生徒たちがリラックスした状態で感じたこと、考えたことを思うがままにアウトプットすることができる機会として、2日目の夕食後は大学生たちとディスカッションをする「がちゅん」のプログラムを導入することにした。

「がちゅん」は、修学旅行生を対象に「がち（本気）」で「ゆんたく（沖縄の方言でおしゃべり）」をすることを目指して設立された株式会社である¹¹。生徒たちはその場でくじを引き、18の班（1つの班は9～10人で構成）に分かれて、この日車座になってディスカッションする仲間たちとクラスを超えて「出会う」ことになる。そのうえで、沖縄で見たこと、聞いたこと、考えたことを話したり、付箋に書かせたうえで模造紙に貼らせたりすることによってそれぞれに印象に残ったことや、問題意識として持ったことを整理させ、アウトプットさせる。この際、自らの考えをうまく言語化できない生徒に対しては、班に1～2名入る大学生がファシリテートする。こうしたアウトプットの時間の後に、班でテーマを決め、さらに

¹⁰ なお、修学旅行中のルールに関しては、生徒たちから選出された修学旅行委員によって定められたが、今年は親睦のために少量のお菓子を持っていくことが認められた。しかし、委員会において沖縄を消費し、ゴミを残してくることにに対する議論が行われ、「ゴミは持ち帰る」というルールが定められたことは特筆すべきことであろう。

¹¹ このプログラムを導入するにあたり、がちゅんとは3度にわたる打ち合わせを重ね、プログラムを共同開発した。なお、がちゅんは本校の修学旅行が行われた直後となる11月5日にすべての業務を停止することとなったが、理由としてはスタッフが少なく旅行会社とのやりとりや学校ごとのプログラム開発などで対応が追いつかなくなったことにある（沖縄タイムス2018年11月9日付朝刊より）。がちゅんの事業停止によって、2018年末までの2ヶ月間で45校6,700人の生徒が影響を受けることとなったが、これはこうしたプログラムに対する需要が高かったことを証明することともいえる。なおこうした事態の後に、新たにこのようなディスカッション形式の学習手法を導入し始めた事業者があることも紹介しておく。

学びが深まるよう大学生がファシリテートする。最後にジグソー法を用いて他の班の発表を聞き、どのような議論が行われたか知ることによって、自分の班で行われていたものと異なった視点から沖縄を考えることができる。

なお「がちゅん」は、主に沖縄戦について学ぶ1・2日目と、現代の沖縄が抱える問題について学ぶ3日目をつなぐものとして位置づけた。これらに共通するのは「構造的沖縄差別」という問題であり、生徒自身の立ち位置が問われることとなる問題である。生徒たちは、様々な問題と向き合いつつ、どうすればこうした不均衡さを解決することができるか、主体的に考えたうえで、否応なく自らの意見を発表しなければならない（写真9～12）。

このように2日目は、沖縄戦と「向き合う」だけではなく、その根底にどのようなものがあるか引き出したうえで、本土の人間が沖縄に対して抱き続けている「構造的沖縄差別」や「無関心さ」が持つ暴力性について、その日のうちに共有することができるよう、工夫した。

第3節 3日目の行程の策定

例年3日目は、シーカヤックやサイクリング、釣り、サンゴの植え付け体験や民泊体験などの様々なアクティビティーに分かれて行動する日となる。しかし今年は、クラス別の行動に分けることによって新基地建設が予定されている大浦湾でシーカヤックを行い、やんばるの自然を体験することが可能となったため、全員で同じ行程をまわりながら、今回の修学旅行のコンセプトである「構造的沖縄差別」を生徒たちが問い続けることができるようにした。

まず1995年に起こった米兵による少女暴行事件の後、普天間基地に代わる新たな基地の建設先となった名護市辺野古において、この問題が辺野古にもたらされた際に住民によって設立された「命を守る会」の代表であった西川征夫さんからお話を伺う機会を設けた¹²。このような行程を策定した理由としては、報道等で目にする機会が多くなった辺野古の海¹³を実際に見ながら、現地でお話を伺うことによって、基地を押しつけられているがゆえに沖縄が抱えざるを得ない様々な問題に目を向けさせることができると考えたからである。そもそも辺野古を修学旅行で訪れる学校は少ないが、辺野古の海を前に住民から話を伺うというプログラムを策定している学校は、ほとんどない¹⁴。しかし熊本（2009）や川北（2011）が

¹² なお「命を守る会」は2014年に解散し、西川さんも現在は「反対運動」から一定の距離を置いている。

¹³ 修学旅行が行われる10月下旬は、当初沖縄県知事選挙が行われる直前であり、本土でも基地問題に関する報道が増えることが予想された。しかしながら翁長雄志知事の逝去を受け、修学旅行直前の9月末に行われた沖縄県知事選挙では、辺野古への新基地建設反対を公約に掲げた玉城デニー氏が当選し、結果的に国と沖縄県との基地問題に対するスタンスの違いが多く報道された。また、生徒たちが現地を訪れた2ヶ月後の12月14日に、辺野古の海への土砂投入が開始された。

¹⁴ 行田（2018）の報告にあるように、和光小学校をはじめとした平和教育に熱心な私学の中には、辺野古を訪問する学校もある。しかしながら、現在住民の方から直接お話を伺う学校はほとんどなく、今回は筆者の紹介によってこれらが実現した。なお、この様子に関してはNHK沖縄放送局の取材を受けることとなり、2018年12月14日に「きんくる」という県内向け番組において放送されたほか、2019年1月27日の「目撃！にっぽん」でも全国放送された。

指摘しているように、辺野古という集落は、単に「安保に揺れる集落」ではなく、50年代に本土からの基地移設が進み「銃剣とブルドーザー」によって行われた強制接収に反対する「島ぐるみ運動」が沖縄全土で行われる中、はじめて条件をつけたうえで基地を受け入れた集落である。また、ベトナム戦争時には莫大なドルが落とされ、沖縄で指折りの繁華街として発展したものの、現在はその名残がわずかに残るにとどまり、過疎化と高齢化が進んでいる実態もある。さらに新基地建設に関しても、集落は当初出された反対決議の後に行われた政府によるあからさまな介入を経たうえで、条件をつけたうえで容認する決議を出している。こうした中、辺野古がどのようにこれまで基地と共存し、間もなく本格的に工事が始まろうとする中、この問題に対してどのように向き合おうとしているのか、住民の視点からお話いただくことにした。あえて住民に話を伺った理由としては、日米安保といったマクロな視点ではなく、ミクロな視点で「構造的沖縄差別」について考えさせるうえで最適だと考えたからである¹⁵（写真13）。

その後、生徒たちは新基地建設が予定されている大浦湾でシーカヤック体験を行うことになる。インストラクターは、この地域に住む名護市議会議員であり、この後向かう「ジュゴンの見える丘」の名付け親でもある東恩納琢磨さんに依頼した。かつて核兵器が貯蔵されていたとされる辺野古弾薬庫と工事が進むキャンプ・シュワブを見ながら、生徒たちは豊かな生態系が展開されている大浦湾で沖縄の自然を満喫しつつ、環境や平和に関して考えることになる（写真14）。

さらに今回は、開発が進んでいない沖縄県の東海岸を一望することができるジュゴンの見える丘まで、やんばるの森に生えるイタジイに囲まれた道を散策するコースも盛り込んだ。生徒たちは、政府が行う「アメとムチの政策」にふりまわされるこの地域を実際に歩きながら、開発が進んだ沖縄県の南部や西海岸と、手つかずの自然が残るものの新基地建設が行われることによって「恩恵」がもたらされようとしている東海岸を比較し、「豊かさとは何か」について考えることとなる。眼下に絶景が広がるジュゴンの見える丘で、今回は「北限のジュゴンを見守る会」の代表である鈴木雅子さんに、ジュゴンの生態や保護活動の取り組みについてお話いただくことにした。このように新基地建設が行われようとしている沖縄県の東海岸において自然体験を行うことによって、生徒たちは一般的に西海岸で行われている「サ

¹⁵ 熊本（2005）は、ヘリ基地反対協議会による「テント村」や沖縄平和市民連絡会を中心とした「ゲート前行動」などの「反対運動」が「よそ者」が中心となって行われていることを指摘した上で、こうした活動が住民の抱えている問題を解決するものにはつながらず、住民の意識と乖離したところで行われていることを明らかにしている。さらに熊本は、2018年1月の名護市長選挙で基地建設を事実上容認している渡具知武豊氏が市長に当選したことを受け、今後騒音などの補償を含めた政府の交渉先が「辺野古集落」ではなく「名護市」になったことをふまえ、辺野古住民が求める条件が次々に反故にされ、辺野古集落が新基地建設を容認する理由がなくなりつつある今こそ、知事は「ゲート前」ではなく「集落」を訪れ、辺野古住民の声を聞くべきであると述べている（沖縄タイムス 2018年12月18日付朝刊より）。

ングの植え付け体験」では考えることができない、沖縄をめぐる「開発」の問題に目を向けることができる（写真 15）。

こうしたアクティビティーの後に、生徒たちは恩納村ふれあい体験学習センターにおいて、豚の丸焼きを食べることによって沖縄の食文化を体験したのちに、恩納村青年団によるエイサーを鑑賞し、自分たちも体育の授業において学んできたエイサーを披露することとなる¹⁶（写真 16）。

このように 3 日目は、沖縄の自然や文化を体験させつつ、現在の沖縄が抱える問題を考えさせることによって、沖縄における様々な問題が繋がっており、複雑に絡み合っていることを体感させることができるプログラムを策定した。

第 4 節 4 日目の行程の策定

例年 4 日目は、国際通り散策で終わる。しかし今年は、これまでの 3 日間で考えたことを総括する日にすべく、佐喜眞美術館において丸木位里・俊によって描かれた「沖縄戦の図」を鑑賞した後に、沖縄国際大学屋上において普天間基地を一望しながら、沖縄国際大学の佐藤学教授にお話しいただき、改めて戦前から沖縄戦を経て現在まで続く「構造的沖縄差別」について考察することができるようにプログラムを策定した。

佐喜眞美術館は、普天間基地の東に位置し、強制接収された土地を返還させたうえで建てられた美術館である。基地のフェンスの隣に立つこの美術館の屋上からは、普天間基地が一望できるほか、基地の中に今も残る亀甲墓を見ることができる。上野誠、ケーテ・コルヴィッツなどのコレクションを持つこの美術館をつらぬくテーマは「生と死」「苦悩と救済」「人間と戦争」であるが、もっとも有名なのは丸木位里・俊の共同制作による「沖縄戦の図」（4.5m × 8m）である。生徒たちには、館長の佐喜眞道夫さんが著した『アートで平和をつくる：沖縄・佐喜眞美術館の軌跡』を国語科の課題図書として事前に読ませたうえで、当日は佐喜眞さんに「沖縄戦の図」の前で直接生徒たちにお話しいただくこととした（写真 17）。

沖縄国際大学は、2014 年に米軍の大型ヘリが墜落した場所であり、事故の際には近くの民家やガソリンスタンド、保育園に部品が飛び散った。事故直後は、米軍が事故現場を封鎖し、警察、消防、行政、大学関係者の立ち入りが一切できなかった場所である。現在も大学の壁の一部や焼かれた木が残るヘリ墜落現場で、基地との「近さ」や「日米地位協定の壁」を体感したのちに、5 号館の屋上まで上がり、オスプレイの駐機場を目の前に法学部教授の佐藤学さんに普天間基地が作られたプロセスや在日米軍の実態についてお話しいただくことにし

¹⁶ 恩納村ふれあい体験学習センターにおける豚の丸焼き体験とエイサーの披露は、本学の開校以来一貫して行っていることであるが、今年は初めて修学旅行前の文化祭においても生徒たちのエイサーを披露した。また、文化祭の企画団体としてエイサー・縁日班ができたことを受け、8 月に恩納村観光協会の金城廣野さんにご来校いただき、直接指導を賜ったうえでパーランクーを貸与いただいた。

た¹⁷（写真 18）。この屋上からは普天間基地のみならず、沖縄戦において米軍が上陸した読谷村の海岸や沖縄戦の激戦地であった嘉数高地や前田高地も見ることができる。生徒たちは、改めて「構造的沖縄差別」について考えつつ、基地の周りに密集して広がる住宅地を見ながら、沖縄の「日常」を体感することとなる。沖縄を象徴するこの地において学年全体の集合写真（写真 21）をとった後に、生徒たちは昼食を食べ、14 時 30 分の便で那覇空港から羽田空港に帰ることとなる。

このように生徒たちが現地で多くの人に「出会い」、「構造的沖縄差別」について思考を深めることができるよう、下見をふまえたうえで 4 日間の行程と見学地を策定した。その後、学年会議の承認を得たうえで、事前学習プログラムを作成することとなった。（川北）

第 2 章 「修学旅行」をめぐる学習 ―事前学習プログラムの報告

第 1 節 「修学旅行」とは何か

2018 年度の修学旅行を立案するにあたって、重視したのは事前学習である。そもそも修学旅行とは何であるか。本校においては、中学 2 年次に「移動教室」、中学 3 年次に「修学旅行」と、いずれも 3 泊 4 日から成る宿泊行事が設定されている。両学年とも同時期に行われる行事だが、学年が異なること、また名称が違うこと、は、行事を実行する上で重要なことである、と考えた。家族や友人と行く旅行とは違う、2 年次の「移動教室」とも違う、「修学旅行とは何か」。事前学習は、生徒たちにその意味を意識させるところから始まった。

2 年次の「移動教室」は文字通り、教室が別の地に移動すること、を意味している。現在本校では京都・奈良に移動して行っているが、他の生徒と協調して行動することや、集団生活における規律の遵守、あるいは公共の場における自身の行動の在り方を考えることなど、通常の教室とは違う場所に移動して、ふだんの学校生活で行っていることを実践していく、という意味合いが「移動教室」には強い。

ではそれに対して修学旅行とは何だろうか。「修学」の字義は『新明解国語辞典』¹⁸によれば、「知識を習い覚えること」とある。さらに「覚える」の意は、同辞書によれば「経験した事や習得した事を忘れられないものとして心にとどめる、記憶する」とあって、いわゆる暗記の意味での「覚える」（「教わった事を反復練習して無難に再現できるようになる」）とは異

¹⁷ 佐藤は、「辺野古に普天間を移せば負担軽減される」「沖縄の経済は基地に依存している」といった沖縄の米軍基地に関するうわさや誤解がどのように生まれ、広まっているか検証したうえで、反証本として『それってどうなの？ 沖縄の基地の話。』を頒布している。これは、web 上において pdf ファイルの形式で無料頒布されており、本校においては事後学習において生徒全員に印刷・製本したうえで配布した。

¹⁸ 『新明解国語辞典』第五版、三省堂、1997 年。

なる意味もあることが示されている。こうした意味合いを正確に反映させれば、修学旅行とは、ふだんとは異なる遠隔地に赴いて、その地で多くの知識を獲得すること、そしてその地での経験のすべてが、忘れがたいものとしてそれぞれの心にきざまれる、そのために行く旅行、ということになるだろう。2年次の「移動教室」とは異なる姿勢でもって臨む旅行であり、その内容の深さから考えて、最上級生となる3年次がふさわしいと、確かに言える。

では、その「修学旅行」で沖縄を見学地を選ぶことは何を意味するのだろうか。

知っての通り、沖縄は太平洋戦争下において地上戦を経験し、甚大な被害に遭った地である。そうした歴史的事実の「知識」を習うだけならば、東京の教室にいても学習は可能だろう。しかし「覚える」＝「忘れられないものとして、心にとどめる」という学びにまで発展させるために、メディアを通じた知識だけではなく、まさに、その地へと行き、そこでしか見られないものを見て、そこでしか会えない人の話を聞き、そこでしか感じられないものを感じて、自ら思考を深めていく、そうした沖縄修学旅行でありたい、と、行事担当教諭として考えた。そのために不可欠なのが事前学習である。

沖縄は日本有数のリゾート地として知られ、実際、家族旅行で沖縄を訪れている生徒は多数存在した。「リゾート地」というのも、沖縄の持つ一面であることは事実である。しかし、リゾート地で癒やされることを目的とした旅行では、見えない、あるいは見ようとしない「沖縄」の側面がある、ということも事実だろう。沖縄戦、それに続き現在なお問題となる基地の島という側面は、生徒にとって、「あまり見たくない／見ないできた」沖縄の一面である。そうした意味で、沖縄で何があったのか、今なお何があるのか、まずは事実を知るために、事前学習を行う必要がある。

生徒には、以上のことを伝え、2018年度の修学旅行に臨んだ。

第2節 事前学習の実践 その1 調べ学習

事前学習の第一歩は、知識の獲得である。最終的には、旅行時の現地での学習に勝るものはないとはいえ、何も知らずに現地に行くのと、知識をふまえた上で現地で思考するのでは大きく違う。一方、沖縄をめぐる歴史、その政治的状況は複雑で、簡単には理解することが難しいものである。まず、概略的な知識の習得として『戦争と沖縄』¹⁹を生徒全員に読ませた。本書の著者である池宮城秀意は、防衛召集されて沖縄戦を経験し、捕虜となって収容所生活を送ったのち、戦後は琉球新報の編集長をつとめたジャーナリストである。岩波ジュニア新書より刊行された本書は、沖縄戦に至る前の沖縄の歴史、沖縄戦の被害、その戦後について、中学生を読者対象にまとめられた本である。国語科の課題図書として、この『戦

¹⁹ 池宮城秀意、岩波ジュニア新書、1980年

争と沖縄』を設定し、生徒全員が沖縄の近現代史の概説を読了できるようにした。

本格的な事前学習はこうした知識をふまえて行った。2018年度の第3学年は全6クラスとも29名で編成されていることから、同じ出席番号どうし学習班を組み、同じテーマで調べ学習を行うこととした。こうした編成にしたのには理由がある。この修学旅行では、現地で数多くの人と出会うこととなり、そこで聞く話、あるいは向き合う現実は、必ずしも生徒にとって「居心地良いもの」ばかりではないが、しかしそれでも、修学旅行に行く以上はそれらの「出会い」に向き合わなくてはならない。事前学習においても、あえて他のクラスの、ふだん接しない相手と組むことで、自分から相手の言葉聞き、相手と対話を重ねることで事前学習を進めたいと考えた。調べ学習は6人ひと組で行い、与えられたテーマに対して、さらに詳細なテーマに分けて、各それぞれが調査を担当し、レポートを執筆する、という形で行った。なお、班に与えられたテーマは資料²⁰の通りである。

さらに、個々それぞれが調べたことをふまえて、全班、口頭発表²¹を行った。発表は各班でレジュメを作成し、6人の中で、司会や発表担当などの役割を決めて、レジュメをスクリーンに映しながら行う、という形をとり、発表を聞く全生徒は各発表に対して評価表を作成し、感想を書くなどした²²。全班が口頭発表を終えた後、再度班で集まって、各生徒が書いた感想を読みながら発表の反省会を行った。

この事前学習を通じて、取り分けて成果があったのは学習発表会であった、と感じている。各自が個々で調べていた知識を互いに共有することを目的としていた発表であったが、同じ学年の生徒が調べたことだけに、聞いている生徒たちは興味を持って聞き取っていた。例えば、沖縄戦でアメリカ軍が使用した武器・弾薬の種類と被害の実態についての発表を聞き、それまで「沖縄戦は悲惨な戦争だった」というような漠然とした印象だったものが、武器の性能がアメリカ軍と日本軍では圧倒的に違うこと、尋常でない量の弾薬が用いられていたこと、アメリカ軍と沖縄で死亡した「日本人」の死者の数の違いが桁違いであることを知って、圧倒的な戦力差を前に、甚大な被害がもたらされたことが具体性をもって刻まれることとなった。

また、ある班が調べて発表した内容が、別の班の発表にも関わっているようなケースがあらこちらでみられ、知識と知識が結びつき立体的に組み上がっていくような印象があったのも特徴的である。これは言ってみれば当然のことで、沖縄の諸問題は複雑に絡み合い、単独で割り切れるものはほとんどない。現在の沖縄の経済の問題は、基地問題と密接に結びついているし、基地が沖縄にある理由は沖縄戦が要因である。それらの問題のすべてを網羅す

²⁰ 本稿末尾 資料1は、この時の事前学習テーマ一覧である。

²¹ 学習発表会は、6月27日(水)4限、7月4日(水)4限、7月6日(金)4限の3回で行った。

²² カラー図版 写真1・2参照

ることは中学生が個人で行うには難しいが、生徒たちの様々な視点で調べることによって、「沖縄」をめぐる諸問題の複雑な姿が、わずかにでも浮かび上がったのではないかと、思う。

調べたことが他の学習分野に結びつくこともあった。「鉄血勤皇隊」について調べた班の一人が、「学徒出陣」と「学徒動員」の違いを説明したことによって、同時期に現代文の授業で読解していた物語に登場する少年が沖縄戦時に「防衛召集」されていたことの意味を知ることにつながった。また、沖縄戦をめぐる発表は複数の班で行われていたが、発表の中で繰り返し登場するのは、沖縄に配備された第三十二軍司令官である牛島満の名であった。その名を事前学習で記憶していた生徒たちが、修学旅行とは別の校外学習で防衛省を訪れた際、牛島が陸軍士官予科学校の校長を勤めていたことに気づき、牛島の別の側面を知ることができていた。これも事前に知識があったことによって、視野の広がりにつながったのではないかと、考えられる。

第3節 事前学習の実践 その2 その他の学習

事前学習は、生徒たちによる調べ学習以外にも様々な形で行った。

まずは教科の実践である。公民の授業では日米安保の問題を詳細に扱い、沖縄の基地の現在について思考し、さらには平和とは何か、尽きぬ問いを問い続けた。現代文の授業では沖縄出身の芥川賞作家である目取真俊の初期作品『風音』を読解して、沖縄戦とそれをめぐる記憶から逃れられない人々の、それぞれの生き方を考える授業を行った。授業の資料や国語科の設定する課題図書にも、沖縄戦に関するものや、沖縄を扱ったものを選書するなどした。保健体育科ではエイサーを授業の中に取り入れ、生徒たちが自分たちで踊りの陣形を考えるなど、主体的な表現行為を行った。前章で述べたように、ここで得た成果を修学旅行現地でも披露したが、それとは別に2018年度の文化祭のフィナーレとして、学年の全生徒で学校グラウンドを使って演舞を行い、多くの保護者や来場者に披露した。こうした取り組みは本校の文化祭では初めてである。英語科ではProject in Englishの授業において、生徒が沖縄の文化を紹介する英作文を執筆し、口頭で発表するという取り組みも行っている。このように、各教科がそれぞれの教育活動の中で「沖縄」に触れ、それが結果として教科の枠を越えた、教科横断型の事前学習へとつながっていった。

また、本校教諭による、リレー形式の講義も行った。学年全生徒に対して、各一時間ずつ講義を行うもので、授業の内容は以下のようになっている。

第一回 生物科／岡崎弘幸・鈴木琢弥両教諭

題目 沖縄の多様な生物、植物の姿と絶滅危惧種について

第二回 国語科／矢野利裕教諭

題目 沖縄と観光：わたしたちはなぜ修学旅行に行くのか

第三回 国語科／頓野綾子

題目 共感の可能性 灰谷健次郎『太陽の子』を読む

第四回 社会科／川北 慧

題目 私たちは沖縄にどのように向き合えばよいのか 基地問題を一例として
上記のそれぞれの講義を受け、生徒は学んだことや感想を書いて、自分なりに整理するという作業を行った。こうした授業が成立するのは、本校の教諭がそれぞれに専門的な知識を持った研究者という側面も持つから、である。

こうした様々な学習に取り組んだ上で、2018年10月26日より3泊4日の行程で修学旅行に臨んだのである。(頓野)

第3章 「修学旅行」という経験 ―生徒たちの感想を手がかりに

第1節 当事者の言葉を受け止める

前章で述べたように、2018年度の修学旅行事前学習は、長期にわたり、多様な観点から取り組んだ。その学習が、修学旅行で現地に赴いた際にはどのような学びに結びつくのか、その点が最も重要である。

事前学習の成果が顕著に表れたのは、生徒たちの、話を聞く姿勢であったと思う。第1章の修学旅行行程で述べられている通り、修学旅行中は多くの人と出会い、その話を聞く機会があった。特に修学旅行初日は、10歳で沖縄戦を経験し家族を失った玉木利枝子さんを、宿泊するホテルにお招きして講演会を開く予定となっていた。初日は、飛行機での移動、沖縄に着いて最初の見学地である「平和の礎」の見学に始まり、「都道府県の碑」を抜けて「健児之塔」まで移動する行程である。ゆっくり移動するとはいえ、起伏のあるところを3時間近く歩いたうえで、ホテルに着いて夕食をとった後に設定された講演会であったため、生徒の聞く集中力が懸念であったが、それは全くの杞憂であった。

約一時間にわたる、玉木さんの幼少期の経験を、生徒は片時も集中をきらさず、その言葉を聞き逃さないように、終始緊張しながら聞き入っている様子であった。こうした様子を見せたのは数名ではなく、学年生徒ほぼ全員と言って良い²³。以下は、東京に戻った後、ある生徒が書いた修学旅行の感想である。長くなるが全文を掲載する。

今回の修学旅行を通じて感じたことはたくさんありました。その中でも特に玉木利枝子

²³ カラー図版 写真5・6参照。

さんのお話しが印象に残りました。玉木さんの話を聞く前に思ったのは、辛い話を聞くのは嫌だな、眠くならないかな、などを思っていました。話を聞いたあと、思ったのは受けとめきれない、ここからすぐに立ち去りたい、と思いました。玉木さんの話を聞いている時、たくさんメモをしました。玉木さんが話していることをどこかにださなきゃ耐えられなかったからだと思います。

その中でも特に印象に残っている話は、3つあります。1つ目は、玉木さんのお兄さんが亡くなってしまった話です。玉木さんのすぐ近くに砲弾がきて、お兄さんには破片が飛び、玉木さんの仲良しの男の子は亡くなってしまった、ということがあった、という話を聞いたとき、想像するのでさえ嫌になりました。この話を自分の身近な人に当てはめたら本当に辛くなりました。その後、玉木さんは仲良しの男の子の死体をまたいで、ガマに向かった、と話しました。聞いている自分でさえ、もう何が起こっているのか、何を話しているのか、わからなくなるほど、本当に辛かったです。

2つ目は、玉木さんの祖父が自決をしてしまった、という話です。その話を聞いているとき、戦争は、何もかも通用しない、頭が良くても力があっても、死ぬときは死ぬ、ということを感じ知らされました。

3つ目は、玉木さんは死んでもいいが美しく死にたい、痛い思いをして死にたくない、10歳の時に思っていた、というお話しです。これを聞いているとき、10歳という少女でも、死を覚悟していて、死んでもいいが死ぬときに痛くない死に方で死にたい、と思わざるを得なかった戦争とは、またその時の国の教育はなんなんだ、意味が分からない、と思いました。

沖縄のことを知るためには、耳を背けたい²⁴ 出来事がたくさんあると思うけど、だけど、それでも聞くことが大切だ、と感じました²⁵。

素朴な言葉で書かれた、この生徒の感想から私たちが学ぶことは多い。話を聞いたときの感想を「受け止めきれない、ここからすぐに立ち去りたい」という、実に正直な言葉で語る彼は、まさに吐き出すように、自分がいま聞いたことを言葉に写しとる。それは、後々の自分の学習のためにメモをする、などといった冷静な判断による行為ではなく、「どこかにださなきゃ耐えられな」という衝動からくるものだ。この、飾らない正直な言葉の、しかしその意味はとても深い。

²⁴ 本来は「目を背ける」あるいは「耳を塞ぐ」といった表現が適切である。しかし、例えば辺野古への基地移設の問題をニュースで聞きながら、多くの人が他人事として聞き流している、という状況を考えると、書き手の生徒は無自覚ではあるものの、「耳を背ける」という誤用はむしろ現状をよくあらわしているようにも思う。あえて原文のままで引用した。

²⁵ 神野翼（中央大学附属中学校 2018 年度第 3 学年）

沖縄戦の経験は、当事者ではない私たちにとって、想像を絶するものである。目を背けてはならない、と自分を叱咤しながら、私たちはそれを聞き続ける。そして「もう二度と戦争をしてはならない」という感想を口にする。しかし、そのような簡単な「理解」が果たしてあり得るだろうか。簡単に受け止めたつもりになること、理解したつもりになること、そのような理解によって語り継がれる出来事は、その出来事の本質を矮小化させていく危うさがある。

上記の生徒は「受け止めきれない」と感じる。戦争と無縁で生きてきた15歳の中学生である。それは当然のことだろう。しかし同時に彼は「受け止めきれない」と感じながら、今聞いた玉木さんの言葉を、自分の手で、自分の言葉で刻みつけてゆくのである。それはまさに受け止めるための第一歩に他ならない。彼が「受け止めきれない」と思いながらも、受け止めることをやめなかったことは、その後の、玉木利枝子という10歳の少女の経験を、細かな部分まで聞き取り、記憶していることから明らかだ²⁶。玉木さんの経験を自分に置き換えて想像してみる。そして想像が嫌になる。玉木さんの行為について考えてみる。そして思考が停止する。それでも、彼は想像することも、考えることもやめない。戦争とは何なのか。わずか10歳の少女が、自分の死に方のことだけを考える、そうさせた国の教育とは何なのか。彼の中にわき起こる違和感、その怒りが後に批評の原動力となるだろう。「受け止めきれない」と思いながらも受け止めることをやめない。その葛藤の果てに、彼は思考する主体となったのである。

第2節 自らを見つめ直す

もう一つ、生徒の感想を引用したい。

沖縄に行き、最初に感じたことは「本当に美しい場所だな」だった。自然の景色や海など見たこともないようなきれいな場所で、本当にここで地上戦が行われたのかと疑った。「がちゅん」のときも、僕は戦争の話よりも沖縄の自然について話し合いたかった。しかし、それができなかった理由は、沖縄で地上戦が行われたという事実があるからだろう。ひめゆりの資料館や平和祈念資料館に行ったとき、戦争を目で見て体感した人たちの話を讀んだ。沖縄戦によって死んでいく人のことが鮮明に書かれていた。その話は全部あわせて10や20という数では収まらない。それだけたくさんの人が死んだのだ。

平和祈念資料館ではたくさんのことを考えた。資料館に入ったところに不発弾が展示されていた。その横に艦砲弾があった。その大きさに僕は驚いた。銃を使うゲームをよくす

²⁶ 生徒たちには、東京に戻った後に、玉木氏から寄贈された手記『少女十歳の戦争体験』を印刷、配付したが、この講演会の際は資料もなく、玉木氏の言葉だけを聞き取る、というものだった。

るが、そこで使われている弾よりはるかに大きかった。それが何百万発も打ち込まれて、生きているのは本当に奇跡だろう。友人²⁷と一緒に資料館をまわっていると、おそらくアメリカの人だろうと思える人が映像を見ていた。友人は「あのアメリカ人は何を思ってここにいるんだろう」と言った。僕は「どれだけ悲惨な戦争をしようと、自分の国が戦争に勝ったのだから、少なくともうれしいのではないか」と想像した。本当は何を想ってあの映像を見ていたのだろうか。

資料館には他校の生徒がいた。その生徒たちは笑いながら資料館をまわっていた。あの悲惨な写真や映像を見てなぜ笑っていられるのだろうか。やはり事前学習はするものだなと思った²⁸。

この感想を引用したのは、生徒が事前学習の大切さに気づいたから、というばかりではない。事前学習を行っていると、生徒からは「戦争の話や基地の話、事件や事故の話ばかりで辛い」という声がよく聞かれた。「戦争の話も大切だと思うけど、もっと楽しい話も聞きたい」とも。大人でさえ、沖縄戦やその戦後、現在抱える問題については「暗くて重い話」と位置づけるのだから、中学3年生にとっては、そうした問題に向き合い続けるのは辛いことであつたろう。そしてその辛さを抱えながら沖縄に行くと、戦争がもたらした「暗さと重さ」が嘘のように、沖縄の海はあまりにも美しい。この感想を書いた生徒も、本当はその自然についてもっと語り合いたかった、と述べる。けれど、それができないのは地上戦があったという現実が立ちはだかるからなのだ、という視点を、彼が獲得していることには大きな意味がある。

現在、沖縄に住む人たちにしても、同じ思いなのではないだろうか。沖縄には美しい海、豊かな自然がある。それは、沖縄を知らない多くの人に見てもらいたいと思えるような、誇るべき郷土の宝だろう。しかしその同じ海で、豊かな森で、かつて何十万という人が死んだ。戦後も、その沖縄戦の結果として存在することになる米軍基地建設のために、そして悪化する経済を解決するための急速な観光開発のために、海は埋め立てられ、生態系は破壊されていく。そして現在も、多くの県民の反対をよそに、沖縄の海に土砂が投入され続ける²⁹。沖縄の海を語るとき、こうした過去と現在の問題を抜きにすることは出来ないだろう。

沖縄を、「戦争のあった島」「基地のある島」「美しい海や自然を持つ島」と、それぞれを別様のこととして語れてしまうのは、その地で生きる者ではないからだ。そうした中、この感想を書いた生徒は、現地の人にとって自分たちの生活するその場を、「戦争の歴史」か「美

²⁷ 原文には、友人の名が明記されていたが、引用するにあたり書き改めた。

²⁸ 飯島弘登（中央大学附属中学校 2018 年度 第3 学年）

²⁹ 辺野古への基地移設工事が再開し、2018 年 12 月 14 日より辺野古沖埋め立てのために土砂投入が開始され、本稿を執筆している 2019 年 1 月現在も進められている。

しい自然」か、というように切り分けることは出来ないのだ、ということに気付く視点を獲得しつつある。

この生徒は他にもいろいろなものを見る。沖縄戦の経験者の証言。実際に使用された砲弾。資料館にいる外国人観光客。あるいは、自分たちと同じような修学旅行生の姿。それを見ながら、彼は考え続ける。「戦争の被害者」と一括りにすることのできない、無数の異なる人生がそこにあったこと。戦勝国の側からは何が見えるのか。戦争で死んでいくものの視点、戦争で勝った側の視点、その双方を想像してみようと試みるのである。

資料館で笑顔を浮かべる修学旅行生に対する違和感を述べた後に「やはり事前学習はするものだ」と文章を締めくくる彼は、学習をしていなかったら自分も同様であっただろう、ということ暗に述べている。すなわち、何も見ることなく、何も聞くことなく、何も考えない。そうであったかもしれない自分自身を客観的に思い浮かべながら、多くのものに気付く視点をいつの間にか獲得していた自分を発見するのだ。そして、そうした変化を自分にもたらしめたのが事前学習であった、というのが、彼の結論だといえるだろう。

事前学習は生徒たちにとって苦痛であっただろう。自分たちの知らない歴史、しかもその多くが戦争と軍隊と基地の話である。しかしそのことに向き合い続けたことによって、生徒たちの視野が開かれ、より深いところまで物事を見据えるようになったと言える。

第3節 思考を継続する

事前学習を経て沖縄に行き、そこで生徒たちは様々なことに自ら気づき、自ら考えはじめた。前1・2節で感想を引用した生徒に限らず、多くの生徒が自分の五感で様々なことを感じ、考え続けたことは、生徒たちの小さなつばやきや行動からも、見て取ることが出来た。「平和の礎」に刻まれた無数の人名、そのあまりの数に圧倒され、たたずむ生徒たち。その中には「三男」「次女」のように名前さえ定かでない人がいること。明らかに日本人の名ではない、朝鮮・中国の人の名前があることの意味は何か。自分たちと同年齢の「鉄血勤皇隊」の慰霊塔である「健児之塔」が、ほとんど観光客が行かないような寂れた場所にあり、そしてその慰霊塔も朽ちかけていること。その周辺に落ちているゴミを見つけて思わず拾う。平和祈念公園ではしゃぐ他の修学旅行生を見て、「何も知らなかったら自分たちもああっだろう、(勉強してきているから)風景が違って見える」というつばやき。数々の慰霊塔の側にある小さな募金箱を見つけて、そこにお金を入れることが誠実な行為なのか、ただの自己満足に終わってしまうのではないかと、友人どうして自然と話をしながら、「それでも、自分に出来ることだから」と募金をする姿…。こうした小さな言葉や行為からは、修学旅行の間、生徒たちが多くの事柄を感じていたことを示しているだろう。そしてそこからのおの思考を深めていたことは、修学旅行2日目夜に行った「がちゅん」での生徒たちの積極的・活発な議論の

様子を見れば明らかである³⁰。

一方、生徒たちの中に芽生えたこうした取り組みが、修学旅行が終わると同時に終わってしまうのであれば、その学習は一過性のものでしかない。修学旅行をめぐる学習を通じて芽生えた問題意識を、東京に戻った後、それぞれの生徒の中でどのように深めることができるか、ということも重要である。

再び、生徒の感想を引用してみたい。

私が今回の修学旅行で思ったことは、基地や沖縄の見方が変わったなということです。1日目、2日目は平和学習が多くて重いなと感じたし、正直聞くのが辛いなとも思ったけど、沖縄のたくさんの問題は沖縄戦に全てつながっていて、本土の自分達が知らなきゃいけないことだと思いました。

沖縄に行く前までは基地問題のニュースは聞き流していたけど、帰ってきて聞いた辺野古工事の問題は他人事として考えることはなくなって、なんで工事再開のためにそんなことまでするのだろうと政府の人達に不信感を感じました。3日目に行ったあのきれいな海がなくなってしまうのはとても悲しいなと思いました。

また、大学³¹から基地を見た時、普通に米軍の人やオスプレイがあるのを見て、今までTVでしか見たことがないものが町の風景として普通にあって、沖縄の人も普通に生活していて、東京でニュースを聞くだけじゃ分からないことがたくさんあるんだなと思いました。

私が今回、たくさんの方にお話を聞いて一番おどろいたことは、身内の中でも基地建設推進派と反対派がいて、そのせいでお互いの仲まで悪くなってしまうということでした。辺野古でのお話をうかがった西川さんが弟さんは基地については賛成で、年に1、2回しか会わないと言っていて、身内の仲までこの問題は悪くしてしまうんだなと思いました。

沖縄をたくさんの方面からもっとみて、たくさん知って、沖縄の問題としてでなく日本
の問題として考えていきたいと思いました³²。

奇しくも、修学旅行から帰ってきた三日後、11月1日に、辺野古の基地建設工事が再開される、というニュースが報じられた。こちらが指摘しなくても、多くの生徒がそのニュースを見ており、テレビ画面を通じて目にする、つい先日自分たちが見学した海の様子に衝撃を受けていた。

³⁰ カラー図版写真 9～12、資料4 参照。

³¹ 沖縄国際大学を指す。修学旅行最終日は、かつて米軍のヘリが墜落した同大学の屋上から普天間基地を臨んだ。

³² 浅田理香（中央大学附属中学校 2018 年度 第3 学年）

上記の感想を書いた生徒は、工事再開のニュース報道を前にして、自分自身に変化していたことにはっきりと気付かされている。修学旅行に行く前と行った後で、同じ出来事に対して自分の受け止め方が違っていたからだ。さらに彼女は、テレビを通じて知識として知っていたはずの事柄を、実際に現地に行って「町の風景」の「普通」の出来事として体感することによって、「分からないことがたくさんある」という判断に達する。普天間基地のすぐ側に民家がある映像や画像は多く目にするが、実際に音や空気を感じることに、あるいは基地周辺を人が歩いていたり車が走っていたりと、当たり前町の日常生活がそこにあることを目にして初めて、事前に知識として知ること、は、「分か」ることではなかったのだ、ということを理解する。そうした彼女にとって、この修学旅行で最も衝撃を受けたことが、基地によって家族の関係性も寸断されていく話だったということは、意味のあることだろう。沖縄における米軍基地の問題は、米軍機の墜落あるいは備品の落下事故や、米兵の暴行問題など、人々の生命や人権が脅かされるという、重篤な問題になってようやくクローズアップされる。もちろんこれらの事故や犯罪は許されることではないからこそ大きく取り上げられるのだが、逆に言えばそれほどの重大事にならなければ取り上げられないということでもある。この感想を書いた生徒は、基地があることによって当たり前の「普通」の生活や、一つの家族そのものが壊れてゆく、という、新聞やテレビでは報じられないような小さな、しかしながら当事者にとっては最も大きな問題を意識するようになっている。そしてそれは、現地に行ったことによって初めて「分か」ることでもある。最も重要なことは、沖縄から帰ってきた後、彼女の中で辺野古の問題は「他人事として考えることはなくなって」いた、ということだ。私たちは沖縄に住む者ではない。しかし、日常生活や家族は自分にもある。沖縄の人たちのそれが、基地によって奪われているということを理解したとき、辺野古の問題は他人事ではなくなっていた、ということは重要だ。彼女の中で、自分の問題として、自分の生活の延長に在る問題として、沖縄の基地の問題をとらえ返したことを意味しているからだ。修学旅行の事後に、こうした認識が生まれていることの意味は大きい。

ところで、前節で引用した生徒の感想を細かく読むと興味深いことが分かる。彼は平和祈念資料館の中で出会ったアメリカ人とおぼしき外国人観光客の姿を見て、級友と話をしながら、相手の内面を想像する。そして、東京に戻り、感想を書く段階で、再び考えるのである。「本当は何を想ってあの映像を見ていたのだろうか」と。それは答えの分からない問いである。しかし、自分とは異なる視点を想像し続けることによって出来事理解はより深まっていくだろうし、何よりも彼の中で思考が継続しているということに大きな意味がある。

修学旅行の事後、ニュースを見て考える。修学旅行中に考えたことを、再び問い返す。生徒たちは、修学旅行の間にいろいろなことを考え、それがしこりようになって内側に残されていく。それらを一つの思考として形にしていけることが、この修学旅行の最後の学習の取

り組みであった。修学旅行から戻った後、生徒たちは各自の問題提起に従って論文を執筆している。生徒たちが設定した論題³³やその論理構成を示した構成メモを読むと、生徒たちの中で様々な問題意識が芽生えていることが分かる。この論文を元に、3学期に学習発表会を行い、発表と質疑応答をすることで、より思考を深める機会を設ける予定である³⁴。

(頓野)

第4章 総合的な「学び」としての修学旅行、その可能性

第1節 知識を習い覚える

この修学旅行を通じて何を成しえたのか、改めて考えてみたい。

第2章で述べたように、「修学」とは「知識を習い覚えること」である。そこから発展して、修学旅行とは、旅行先での経験を忘れがたいものとして心に刻む、そのような学びの場でありたいと考えて行事を立案した。それはもう少し言えば、生徒たち一人一人が、修学旅行で感じたことや考えたことを、自分の問題につなげて考え続けてゆくといったことでもある。第3章で述べた、沖縄現地での取り組みや、その後の問題意識の継続性を考えると、こうしたねらいに対して、一定の成果があったと言って良いだろう。そしてこのような成果を支えたのは、ひとえに、修学旅行をめぐる「学習」そのものであった、と言うことができる。

しかし、一口に学習といっても、それは容易なことではない。学校教育における平和教育の難しさについては、次章で川北が詳細に述べるが、ここでも少し触れておきたい。

そもそも大前提として、教育とは何を目的として行われるのかと問えば、「平和で民主的な国家及び社会の形成者」(教育基本法 第一条)³⁵の育成を目指す、ということになるだろう。もちろん、この条文にある「国民」とはいったい誰なのかという問いはあるものの、教育が「平和で民主的」な社会の実現を目指すために行われることには変わりはない。

だから、学校教育の現場で「平和」がテーマにならないことはない、と言えるだろう。にもかかわらず、あるいは、だからこそ、なのか「平和教育」はある意味、硬直化している(詳細は次章に譲る)。

そうした状況の中で、何を成すべきか。私自身がこだわったのは、「平和は大切だ」という結論から入るのではなく、まずは、沖縄戦や戦争に端を発する沖縄を巡る問題とは何か、生徒たちが正しく知ることができるようにすること、そしてその状況に対して想像力を働かせて考えることができるようにすること、そうした環境作りをすることであった。

³³ 本稿末尾 資料2に、主な論題を掲載している。

³⁴ 学習発表会は、2019年2月20日に行うこととしている。

³⁵ 教育基本法 第一条「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」

知識の獲得という点については、第2章で述べた調べ学習がそれに相当するが、「生徒の主体的な学び」ということが重要視される今日においては、多少強引に歴史的事実に向き合わせた感は否めない。しかしこれは必要なことであった、と今でも思う。沖縄を巡る問題には、できれば知りたくなかった、と思うような事柄が多く存在するだろう。例えば「集団自決」というテーマについては、このテーマを扱った生徒たちも発表を聞いた生徒たちも、そのあまりに惨い事実に少なからずショックを受けていた。ふさぎ込んでしまう生徒、「こんな酷い歴史が日本にあることを、これまで知らなかった」と嘆く生徒もいた。しかし後に、例えばこの班のメンバーの一人は「集団自決」について家庭で家族と対話を持っていたし、発表を聞いた生徒の中には自分で調べ始めて、改めて戦場とはどういう場なのかを知ることになった。あるいは基地を巡る問題を扱っていた生徒が、十二歳の少女が米兵によって強姦されたという事実を学習の場で扱うのは不適当だろうか、ということを真剣な顔つきで相談に訪れたこともあった（適切な言葉、表現を慎重に選んで、扱うように指導した）。

このように、生徒たちは自分の意志によらずして出遭ってしまった数々の出来事に、時間をかけて向き合っていくことになる。「できれば知りたくなかった事実」を捨て置き、自分にとって「居心地の良い出来事」だけを見るようなことになれば、それは沖縄を巡る現状と変わらないだろう。予断や偏見、あるいは憶測によらない、正確な知識の獲得が、まず必要である。

一方で、歴史的事実をただ投げ与えれば、生徒にとって良い学習になるのか、といえそうでもないだろう。旅行2日目の「がちゅん」でも「平和学習」はどうあるべきなのか、多く話題になっていたが、戦争の被害を伝える画像や映像をただ見せ続けるだけの「平和学習」は、生徒を受け身にさせ、時に拒絶させかねない。今回、前述のように生徒が徐々に出来事に向き合っていたのは、与えられた大テーマに対して、自分から調べ、自分の言葉で他者に伝える、という経験があったからではないか、と思う³⁶。調査学習を始めた際、どこから・何を調べて良いか分からなかった生徒たちは、私たち教諭に何度も質問をしながら、本校図書館の誇る膨大な書籍や、インターネットを駆使しながら、テーマの核心へと迫っていった。その過程で、生徒たちは、いくつもの引っかかりを覚えながら、多くの知識を吸収していくことになる。そして、事前学習の発表会に向けて言語化するために、自分が知り得たことを整理することになるだろう。

さらには、生徒自らがそれぞれ吸収していった知識を、各教科で行った授業や、事前学習のリレー講義などと関連づけて結びつけていくことで、生徒自身が深い理解を得ることになったのではないかと考えられる。

³⁶ 調べ学習の際、教諭が与えたのは、各29班への、29種の大テーマだけで、あとは各班のそれぞれの観点で小テーマを設定し、独自に調査を行う、という形をとった。

第2節 覚える＝「忘れられないものとして心にとどめる」

一方、知識の習得だけでは、試験前に詰め込んだ内容をすぐに忘れてしまうように、「心にとどめる」ということにはならないだろう。出来事の当事者でない者が、その出来事を理解するために必要なことは何か。この時重要なのが、想像力を持つことだ。

アウシュビッツ・ミュージアムの公認ガイドを務める中谷剛は、『『平和を考える』授業が一人でも多くの学生のために、様々な角度から歴史と向かいあう機会に恵まれるような場となることを期待したい。なぜなら、戦争を知らない私たちが想像力を培うために必要不可欠な条件だからである³⁷』と述べる。想像力をもつために、様々な視点から歴史的事実に向き合うことが必要不可欠だ、と述べるこの言葉は、逆に言えば出来事に向き合うためには想像力が不可欠だ、ということも示しているだろう。

想像力の獲得には、文学作品が大きな手がかりを与えてくれる、と考えている。例えば灰谷健次郎の『太陽の子』を考えてみよう。この物語は、沖縄から神戸に移り住んだ主人公の少女一家と、やはり沖縄から移住した人々、あるいは地元神戸の人々の交流や日常が描かれる。登場人物の何人かは沖縄戦を経験しているが、太平洋戦争終結から30年経った物語の現在においても、彼らは沖縄戦の記憶に苦しんでいる。例えば、「ろくさん」という人物は、日本兵に言われるがまま我が子を締め殺した過去を持つ。「ろくさん」は子どもの首を絞めたその腕も戦争で失ってしまうが、物語の現在においても「この手はもうないのに、この手はいつまでもいつまでもわしを打つ³⁸」のである。あるいは、主人公「ふうちゃん」の父、大峯直夫も少年時代に沖縄戦を経験した人物であるが、この人物の場合はもう少し複雑だ。直夫は、物語現在の半年前に突然心を病んでしまい、作中でその内面は語られることはないが、漏れ出る言葉から、沖縄戦の記憶により心を病んでしまったことが分かる。しかし彼は、沖縄戦の惨禍から、娘の「ふうちゃん」を守ろうとして発作を起こすのである。存在しないはずの手で自分を打ちすえ続ける人、戦場には居るはずのない自分の娘を戦火から守ろうとする人。論理的には説明のつかないこれらの事柄を理解するためには、想像力を持って解釈するほかない。下河辺美知子は「トラウマの時間に取り込まれたとき、人は、過去が現在の中に押し入ってくるように感じるだろう。あるいは、現在が過去に吸収されてしまったと思うかもしれない。今を苦しんでいるはずのトラウマ患者の身体は、過去のあの時間を繰り返し体験し続けるからである³⁹」と述べている。これに習っていえば、子どもの首を絞めた感触を覚えているその手を、後に物理的に失っても、その失った手で自分を打ち続ける

³⁷ 中谷剛『ホロコストを次世代に伝える』岩波書店、2007年、70頁。本稿の第5章で述べられる「入試問題事件」の反省から「平和を考える」授業を始めた青山学院大学の取り組みに対して述べられた言葉である。

³⁸ 灰谷健次郎『太陽の子』、角川書店、383頁。

³⁹ 下河辺美知子『トラウマの声を聞く 共同体の記憶と歴史の未来』みすず書房、2006年、20頁。

「ろくさん」は、一生自分を許さない。沖縄戦の惨禍から、その時生まれてもいない娘を守ろうとする直夫は、今もなお、沖縄戦下を生き続けている。二人とも単純に過去の記憶を想起しているわけではない。「過去が現在の中に押し入って」きて、「過去のあの時間」を今ふたたび、生きさせられているのである。だから二人にとって、時間は解決にはならない。何度でも「過去のあの時間」に立ち返り、それが今を蝕んでいくからだ。

このような物語の解釈は、人物の心情や出来事について、明文化されていない、言葉の背景にある文脈を想像し、論理的に考える力を私たちに身につけさせる。物語は虚構ではあるが、しかし、その読解を通じて豊かになる想像力は、やがて現実を思考する力へとつながってゆくだろう。

『太陽の子』を一部読解した私たちは、沖縄で玉木利枝子氏の講演を聞く。そして、炸裂した砲弾の破片によって自分の真横に居た兄が死亡した様子を語る、玉木氏のその声が震え、言葉が出なくなった姿を見て、私たちは、物語の登場人物ではない、現実の彼女もまた「トラウマの時間」を生き続けていることを知るのだ。恐らく修学旅行生の前で何度となく自己の体験を証言してきた彼女は、兄を失った日から70余年が経ってもなお、それを語るとき沖縄戦を再び経験する。そして幾度目か、もうわからないその追体験を、今彼女に強いているのは、他ならぬ私たちなのである。

本稿第3章で、玉木氏の講演に関する生徒の感想を引用したが、事前学習が概略的な、いわゆる「大きな物語」にとどまっていたならば、このような感想は生まれなかったのではないか、と思う。沖縄戦の被害、悲惨さ、それを概略として知るにとどめるのではなく、沖縄戦の死者、あるいは生き延びた人の、個々一人ひとりの人生が様々な形で奪われたということを想像する。そしてそうした経験をした、そのひとりに証言をさせるということは、その出来事を再びその人に経験させることなのだ、ということに生徒たちは気付くことになる。その結果、自ずと生徒たちは自分たちの在り方を選択する。それは、当事者の言葉を、決して聞き逃さない、という姿勢であった。

沖縄出身の芥川賞作家である目取真俊は、メディアが出来事を切り取っていく暴力に抗するために、民衆や無名兵士といった「低い視点」で沖縄戦を捉えることの重要性を述べている⁴⁰が、生徒たちは、戦争当時十歳の少女という、まさにもっとも「低い視点」からの語りが、鮮明な映像よりも圧倒的な質量でもって自分たちに沖縄戦という出来事を突きつけてくることを実感したことだろう。

第3節 自己を問いたす

玉木氏の講演に限らず、生徒たちは4日間の行程の中で、多くの人の言葉に向き合い、多

⁴⁰ 目取真俊『沖縄「戦後」ゼロ年』生活人新書、2005年、90頁。

くの出来事に向き合った。第3章で紹介した例だけでなく、大多数の生徒たちは、出会った言葉や出来事に対して深い考えを巡らしていた。事前学習で身につけていた知識と想像する力をもって、沖縄の、その現場に立ったとき、生徒たちの視野が開かれ、鋭敏な感性によって多くを感じ取っている印象を受けた。そうやってつかみ取ったものを、東京に戻ってから、各自が論文として昇華させていくことになる。

この事後学習は、今年度の「修学旅行」のすべてを表しているように思う。生徒たちは自ら論題を決め、論文の構成を考えていく中で、教諭に積極的に質問し、自分の論理の方向性を模索していった。積極的に質問に来たのは事前学習の調べ学習と同様だが、「何をすれば良いか」ということを聞きに来ていた前者と違い、事後学習においては多くの生徒が、教諭と議論しに訪れていた⁴¹。自分の論理を教諭にぶつけ、対等に議論することで、自分の考えを整理・深化させていく彼らの行為からは、生徒たちが、ただ知識を授け渡されるだけの存在ではなく、自ら思考する主体性を獲得していったことを表している。

そして、思考を深め、徹底的に考えていけばいくほど、生徒たちは葛藤することになる。考えても考えても分からないこと、どんなに言葉を尽くしても自分が見聞きしたことをとても伝えることが出来ないこと、戦争の当事者ではない自分に果たして語ることができるのか。

そうした葛藤を突き詰めていった者は、最後に問われるのは、実は自分自身なのだ、ということに気付くことになる。

次に引用する文は、事後学習で執筆された論文の一部である。この論文を執筆した生徒の思考を分析することで、本年度の修学旅行の取り組みを総括したい。

『沖縄問題の当事者は誰か』⁴²と題されたこの論文は、以下のような問題提起から始まる。

キミは「沖縄」に対してどのようなイメージを抱いているだろうか。僕は二学期に入ってから考えが上手く一つにまとまらなかった。「楽しい観光地」なのか。ニュースでよく見る「様々な問題がある土地」なのか。「地上戦のあった悲しみの地」なのか。本土の人々は沖縄に対して「楽しい観光地・リゾート地」と連想することが多いと思う。最初に僕が抱いたのも、そんなイメージだった。自分自身を含め何故そういった考えを持つ人間がいるのかまず考えてみたい。

この論文の筆者である生徒は、自分自身が抱いていた「沖縄」というイメージを振り返る

⁴¹ 私自身も多くの質問を受けたが、「歴史の教科書の記述内容が年々減っていき、沖縄や特攻隊の記述も削られていることをどう思うか」「沖縄戦の経験者が語れなくなっていったとき、どのようにしたらその証言を引き継げると思うか」「県民の意志に耳を貸さず、基地移設が行われていく現状は民主主義と呼べるのか」といったように、生徒自身が自分の中にわき起こる疑問を教諭にぶつけて、自分の中で整理しようとする、そういった質問が相次いだ。むろん、質問を受ける教諭の側の思考も問われることになる。

⁴² 奥谷湧斗『沖縄問題の当事者は誰か』（中央大学附属中学校 2018 年度 第3 学年）

ところから論を始める。事前学習は2018年度の1学期・4月から始まっていたが、多くの知識を獲得していくうちに、「沖縄」が理解できるようになるところか、むしろ「考えが上手く一つにまとまらな」くなっていく。

その分からなさを抱えながら、彼はまず、論題である「沖縄問題の当事者」とは誰なのか、改めて確認する。

沖縄は日本の一部である。つまり沖縄の問題＝日本の問題なのである。しかし、基地問題に関する本土の人々へのインタビュー等を見ると、「沖縄も大変だ」とか「沖縄の人が～」とよく聞く。日本の問題であるはずの沖縄問題に当事者でありながら他人事のように考えてしまっているのである。

彼の立場は明確だ。現在において沖縄が「日本」に所属しているのであれば、その日本に住み、「日本人」と自らを認識する者は、等しく沖縄の抱える問題の当事者である、というのが、その主張であるといえるだろう。しかし「本土」の人々は「自分に直接影響がない」ために、沖縄の問題から距離をとっている、と指摘するのである。

「本土」の人間にとっても己の問題であるはずの沖縄を、どのように捉えればよいのか、彼は現代文の授業で読解していた物語の登場人物の言葉を手がかり⁴³に、「観光」という側面、「地上戦の地」という側面、「社会的・経済的」に多くの問題を抱える地、という様々な側面を一つ一つ分析してゆく。そして考えた末に彼は、「僕は混乱してしまう。(中略)考えの軸が揺らいでしまい、旅行前では思考ストップをすることも多々あった」。この生徒は、沖縄をめぐる問題の複雑さに直面し、思考停止に陥ってしまう。彼に限らず、「本土」の人間の多くは、沖縄の問題は複雑な問題、高度に政治的な問題である、として、いつしか考えるのをやめてしまう。しかし、この論文を書いた生徒は、沖縄の地に立って、再び考え始めるのだ。

けれど、旅行中に「ひとつの場所で複数の感想を持ち帰り、その〈複雑さ〉を体感することが重要である」⁴⁴ということを意識して見学したことで、沖縄そのものに対しての看法が明らかに変わった気がした。荒崎海岸なら、美しい海が見られる絶景ポイントの一つ

⁴³ 目取真俊『風音』。この物語の中では、区長を務める人物が、村にある沖縄戦の遺骨を利用して村を観光地にしようとする発言をし、戦死者を金儲けに使うのか、と述べる主人公と対立する場面がある。実は主人公の側にも私的な思惑があるし、一見道徳心の無いように見える区長の側も、沖縄、とりわけ物語の舞台とおぼしき県北部の経済的な問題を考えると、現実的な発想である。この場面は沖縄の抱える複雑な問題をよく表している。なお、『風音』は、目取真俊『水滴』（文春文庫）に所収されているが、現在は絶版となっている。

だが、戦時中はゴツゴツの岩場を裸足で逃げ惑う人々で溢れていた。辺野古浜なら同じく美しい海、南国感溢れる砂浜や貝殻の溢れる住民の海だが、今は基地移設問題が深刻化し、土砂投入も行われてしまった。様々な感想を持ち帰ることで、沖縄の負の面を理解していたつもりが、ほとんど理解していなかったことを強く実感した。基地移設に賛成する者と反対する者が県内で対立してしまっているという実態。反対派代表の玉城知事が就任したのにも関わらず、相変わらず移設の方針を変えず、しまいには住民の意見を無視して工事を進めてしまったという、目を疑う政府の対応。僕はこんな現実には困惑したが、同時に怒りも芽生えていた。もし自分が沖縄県民だったらどんなにやるせないだろう、と思っていた。

この指摘で興味深いのは、沖縄で、一つの物事に対して複数の視点で考えようと意識したら、「沖縄の負の面」＝戦争や基地の問題を、「理解していたつもりが、ほとんど理解していなかった」ということに気付かされた、と述べることだ。文中にある荒崎海岸については、第1章第2節で川北が詳細に述べているが、「ひめゆり」の学徒の終焉の地であるこの海岸は、全く観光地化されていない手つかずの自然が残された場でもある。その海の美しさを堪能しつつ、一方で、戦時中はこの場で追い詰められて死んでいった人たちがいたことを考えたとき、70余年前のその瞬間もまたこの海は美しかっただろうと思えばこそ、その対比の中で、当時のあまりに絶望的な状況に向き合わされた、ということだろう。多様な視点を持つことによって、出来事を広く、そして、より深く知ることになる、ということ、彼は学び取っている。

ここで重要なのは、この生徒は、思考停止のままそこで立ちすくむのではなく、自分のものの見方を自ら変化させていくことで、「沖縄」を相対的にとらえる力を獲得していった、ということだ。同時に、修学旅行前は「混乱して」立ち止まった彼が、沖縄を多様にみる視点を獲得したことで、「困惑」しながらも「同時に怒りに芽生え」、思考を突き詰めてゆくのである。この「怒り」は、川北が第1章で述べるコンパッション＝共感共苦そのものに他ならない。

「沖縄」という地が置かれている現状、その地で生きる人々に共感し、その視点から物事を考えるようになった彼の目は、最後は自分自身に向けられる。彼は続けて述べる。

今、「もし自分が沖縄県民だったら」とは言ったものの、コレは問題発言である。最初の方で述べた通り、沖縄の問題は日本の問題なのである。つまり、「もし」という仮定以前に、僕達は自らの問題として考えなければならない。ニュースを見て、「今度は辺野古

⁴⁴ 事前学習のリレー講義、「沖縄と観光：わたしたちはなぜ修学旅行に行くのか」の中で、講師をつとめた矢野が、生徒たちに提言した言葉。

に移設か」と思ったり、「全くひどい政府だ」と語ったり、そもそも興味を示さず無視を決め込んだりしている人間もたくさんいると思う。辺野古に土砂を投入する政府の政策は確かにひどいかもしれない。しかしその政府を選んでいるのは一体どこの誰なのだろうか？移設先だけ他人事のように確認するだけの人間や、無関心な人間は、自分の住んでいる地に移設します、と言われたらどう思うのだろうか？さて、自分が無意識に差別をしていることに気付いた僕達は一体何をすればいいのだろうか。「沖縄に基地があるのは仕方の無いことだ」と今言うことができるのだろうか。沖縄に犠牲を強制し（てきた自分たちは：引用者筆）、基地問題を、沖縄をどう捉えれば良いのだろうか。

「自分が無意識に差別していることに気付いた僕達は一体何をすればいいのだろうか」という自問自答は、彼が思考を巡らしてぶつかった問いである。沖縄の問題に表面的な反応をしながら、決して積極的解決に向けて関わろうとしない、その在り方を「無意識に差別している」ととらえた彼は、例えばそれは投票行動によって「政府を選んでいる」無自覚な大人だけでなく、「僕達」もまたそうだ、ということに気付かされるのだ。このように己を問いただす視点を、中学3年生が持ち得ていることには驚嘆を感じる。

「一体何をすればいいのだろうか」と自問自答する彼は、「沖縄のことを考え続ける。他人事としてではなく、自分自身の抱える問題として意識して考え続ける」と、明確な結論を述べて、論を終えている。それが、沖縄の問題をめぐる当事者でありながら、これまで「無意識に差別してい」た自分の、負うべき責任なのだ、ということ、彼は選ぶのである。

第4節 「修学旅行」という可能性

前節に引用した論考を読んだとき、修学旅行という取り組みの可能性を思う。生徒が自ら知識を得て、それを言語化する。生徒の中に点在する知識を線でつなぐように、生徒が想像力を持って出来事に向き合えるように、教諭の側も多くを発信する。時間をかけて、そうした準備を整えて現地に向かったとき、生徒の研ぎ澄まされた感覚が多く的事柄を捉え、そして継続して思考し続ける主体となる。思考する自分自身の在り方を問い返しながら。

この沖縄修学旅行を通じて考えたこと・取り組んだことは、異なる場面での、異なる問題に対しても、向き合う力を生徒たちに身につけさせることになるだろう。その意味で本年度の修学旅行は、総合的な「学び」の場としての役割を果たすことができた、と言って良い。

ところで、もし修学旅行を、パッケージ化された宿泊行事、ととらえていたら、このような成果には到達しなかっただろう、と思う。当然ながら、この行事を通じて常に問われるのは、教諭の側、学校の側の姿勢である。おざなりな、年中行事のような平和学習をやっただけで済ませていれば、生徒はすぐにその浅薄さに気付くだろう。下嶋哲朗は著書『平和は「退

屈」ですか』において、沖縄の高校生たちのディベートを取材し続けた内容を報告しているが、「平和学習なんて沖縄戦のビデオを観て講演を聞く、のワンパターン。毎年その繰り返し」と感じていた学生たちは、教諭の背中を見ながらあきらめてしまった、と述べている⁴⁵。

例えば沖縄の問題のように、生徒たちが目を背けたいと思うような現実が立ちただかっても、それでも生徒たちが自ら学ぶことを選び取るような環境をどのように作ることができるのか。教諭による一方的な授業ではなく、生徒の主体的な学びの重要性が説かれる今日、まずは学校や教諭が考え努力することが必要になってくるだろう。教える側が学習環境作りに工夫を凝らしながら、考え続け、試行錯誤する。時には生徒が厳しい現実に向き合うことになっても、そのことの必要性や大切さを教える側が諦めずに問いかけ続ける。そのことによって、生徒は時にこちらが驚くような、優れた取り組みを見せる。そしてその姿から、再び私たちは学ぶことになるのだ。

沖縄から戻った三日後の11月1日、辺野古への基地移設の工事再開が取り決められ、12月14日には海中への土砂投入が始まった。その日、NHK 沖縄では辺野古の状況をめぐる番組⁴⁶が放送された。この番組は基地建設という「国策」によって振り回される辺野古の住民の苦悩を追った番組だ。基地を「容認」する人は、それが辺野古の未来につながることを願って、「国策」をやむなく受け入れる。基地に「反対」する人は、これもまた辺野古の未来を願いながら、共に歩んできた地元の人との対立を強いられることに苦しんでいく。その現状を伝える番組を、修学旅行の後、公民の授業で見た生徒は次のように書いている。

2人とも軸は同じだが対立してしまう。だれが悪いとかではなくやるせなかった。

基地問題を知らない事は本土の人はできるが、逃げたくはないと思う⁴⁷。

こうした生徒たちの言葉に出会うたびに、私自身が何度も学ぶ。

ノーマ・フィールドは、「平和」について真剣に語るができなくなりつつある現状に抗いながら、次のように述べている。「夢物語に聞こえるかもしれない。でも、一人ひとりの命、生活、個性が大事にされる社会は夢見てこそ目指すことができるのではないか⁴⁸」。

15歳の中学生たちが、長い時間をかけて多くのものに向き合い、考え、葛藤し、そこから紡がれた素朴な言葉は、夢を語るものであるかもしれない。しかしそれを「夢物語」だと切り捨てる資格は、誰にもない。

⁴⁵ 下嶋哲朗『平和は「退屈」ですか 元ひめゆり学徒と若者たちの五〇〇日』岩波現代文庫、2015、17頁。

⁴⁶ NHK 沖縄『きんくる 辺野古に住んで見えたことー“移設先の町” 4ヶ月の記録』2018年12月14日放送。

⁴⁷ 寺島慶一郎（中央大学附属中学校 2018年度 第3学年）

⁴⁸ ノーマ・フィールド『いま、〈平和〉を本気で語るには』岩波書店、2018年、55頁。

「逃げたくはない」と言う 15 歳を前に、私たち自身が問いただされている。（頓野）

第 5 章 学校教育における平和教育のあり方について

第 1 節 「戦争」をどのように考えさせるか

本節では、学校教育において沖縄戦をどのように考えさせることが可能であるか、改めて考えてみたい。戦争を考えさせる教員の姿勢が問われた事件として、2005 年に起こった「青山学院高等部入試問題事件」がある。この事件は、青山学院高等部が英語の入試問題で、修学旅行に行った生徒が防空壕を体験した後、ひめゆり学徒隊員の体験談を聞き「正直言って、彼女の話は退屈で飽きてしまった。聞けば聞くほど防空壕の印象が薄れていった。彼女はそこの話を何回もしており、非常に話し上手になっていたと思う」という問題文を載せたのちに、「なぜ筆者はひめゆりの話が好きでなかったのか」と問い、「彼女の話しぶりが好きではなかった」などの四つの選択肢から答えを選ばせるものであった（朝日新聞 2005 年 6 月 10 日朝刊より）。この事件からは、出題者である教員でさえ、戦争体験を聞く者としての「責任」を持ち合わせておらず、沖縄において修学旅行を行う意味について全く理解してない「修学旅行の実態」が見受けられる⁴⁹。

また高嶋（2012）は、沖縄の平和教育を「沖縄戦の悲惨さの確認ばかりで『戦争は 2 度としてはダメ』の感想文で先生は喜ぶ、と生徒たちに言われてきたマンネリ平和教育 40 年」と述べている。さらに山口（2013）は、平和教育において生徒たちが「戦争体験の話ないし写真、映画などを繰り返し見せられることで、戦争への憎悪ではなく気持ち悪いものを見せられる平和教育への嫌悪がおり、平和教育というと『もうわかっている』という気持ちになってしまう」という問題⁵⁰や、「平和教育の結論が『戦争はだめ、平和が大事』という『結論の押し付け』になっている授業が多いため、子ども自身が思考することなく、その結論を感想文に書けばいいという認識を持っている」実態を明らかにしている。

こうした「平和教育はマンネリ化している」という言説に対し、山口（2018）はこうした問題が「沖縄戦 70 年という時間が生み出した問題ではなく、『子どもが主人公の授業をどう

⁴⁹ 下嶋（2015）は、語る人は平和や命を伝えようと決意して語るのに対し、話を聞く人が決意して聞いてないという「聞く人が語る人に一方的によりかかる戦争体験の語り継ぎの形」が入試問題事件の背景にあるとすれば、「この事件をつぶすのではなく、積極的な『問題提起』としてとらえなければならぬ」としたうえで、戦争体験を継ぐだけでなく、それを伝える人になろうと試行錯誤する若者たちの実践について報告している。また本校では、事前学習のリレー講義において「共感の可能性」と題して頓野が講義を行った。この講義では、灰谷健次郎『太陽の子』の読解を通じ、トラウマの時間を生きる沖縄戦の経験者の心中を、同じ沖縄の出身だからといって理解できているわけではなかったこと、一方、自分の問題に置きかえてみることで初めて相手の心の一端を理解できた、という登場人物の在り方について触れている。

作り上げるのか』という問題」であり、「学ぶ主体である子どもに疑問や思考の自由が保障されていること、つまり子ども自身の力で平和とは何か、なぜ平和が大事かを考える場が授業に作り出されていること」が平和教育において重要であると指摘している⁵¹。

これらをふまえたうえで、本校における実践をふりかえってみよう。本校では事前学習において、まずそれぞれに与えられたテーマを自らの興味・関心にそって調べさせるところから始めた。また、生徒や教員による発表の後にはリフレクションシートを提出させ、常に生徒が感じた疑問を書かせるようにした。こうした疑問点は生徒にフィードバックを行い、さらに生徒自身が班ごとにディスカッションすることができる時間も設けた。また、生徒たちが自学自習できるように校内に沖縄文庫を設置した。

沖縄現地での行程では行程表にある通り、一斉移動を極力減らし、クラスごとまたは学年を二分割して少人数でも行程をこなすことができるようにした。いうまでもなくこれは生徒一人ひとりが「小さな物語」と「出会う」ことができるようにするための工夫である⁵²。

また、戦跡をただ散策するのではなく、多様な視点から沖縄戦について考えることができるよう行程を策定した。こうした中、現地では多くの生徒が積極的に各地で「出会った」方々にその場で質問を行っていたことが印象的である。質問の中には、「なぜ話そうと思ったのか」「なぜ戦争は起こるのか」「今現在を平和と考えているか」といった本質的な深い問いも多くみられた。

さらに現地において、生徒たちが自由にディスカッションすることができる機会を設けたことも特筆することといえる。中には「事前学習」のあり方や「現地の行程」に対して不満を言うことからディスカッションを始めるグループもあった。そうした中、「私たちは何のために沖縄に来ているのか」ということを改めて考えたうえで、生徒自身が「平和教育のあり方」や「平和の作り方」といったことまで主体的に議論を発展していく過程は目を見張るものがあった。生徒たちが主体的に悩み、考えた痕跡は資料4を見ていただければわかる通りである。

⁵⁰ こうした一方で安井(2008)は、『はだしのゲン』について「細部の描写だけが伝わって、スピリッツ(精神)が伝わってこない」という意見を述べた識者に対して、「細部の描写(黒こげの死体など)からスピリッツへの筋道は、それにこちら側からかかわっていくこと、つまり共感―共同や共感共苦をもとに、学習者がともにこの犠牲に向き合うことによってつけていくべきもの」であり、学習者を「伝え方」の受け手にすべきでないとしている。「青山学院高等部入試問題事件」やこうした指摘をふまえると、戦争体験の話ないし写真等の資料は、史実と向き合わせるという点において、必要不可欠であるといえよう。

⁵¹ なおこうした指摘をふまえたうえで、沖縄県歴史教育者協議会は定期的に『歴史と実践』を発刊し、さまざまな実践例の紹介をおこなっている。

⁵² しかしながら、今回の修学旅行においては173名の生徒を引率しなければならず、細分化したグループに分ける限界も感じるものとなった。なお同年の12月に中央大学附属高校の「教養総合Ⅰ」において行った実地調査では、履修する生徒数が34名であったため、常に6～7人の班に分かれたうえで、現地の大学生をファシリテーターに入れた行程を組むことによって、現地でディスカッションする機会を多く取り入れることができた。この実践報告に関しては、本校HPに掲載したものの、詳細に関しては次稿で改めて紹介したい。

現地で学びをふまえ、生徒たちは自らの興味・関心に応じて新たにテーマを設定し、事後学習である論文作成に取り組んだ（資料2）。さらに2月にはシンポジウム形式で行う学習発表会において、学年全体で「がちゆん」を行うことを修学旅行委員が中心となって企画している。このように本校における修学旅行は、形ばかりの「平和学習」として沖縄戦を学び、現地で戦跡見学を行うにとどめる学校と比較すると、生徒たちが主体的に考え、表現する機会が多く取り入れられているといえるであろう。

第2節 「平和」をどのように考えさせるか

内閣府の「社会意識に関する世論調査」によると、現在の世相について「平和」を掲げる人は、1975年から現在に至るまで最も多い。古市（2015）は、こうした日本は平和であるという「大きな記憶」があると指摘し、「背伸びして国防の意義を語るのではなく、安直な想像力を働かせて戦死者たちと自己を同一化するのでもなく、戦争を自分に都合よく解釈しなおすすめもなく、僕たちは戦争を知らない、誰も戦争を教えられない」という事実から出発しなければならないと述べたうえで、世界のいたるところに残されている「小さな記憶」をたどる旅を行っている。多くの「小さな物語」と「出会い」、思考させることをコンセプトとした本校の修学旅行は、まさにこのような旅行であったといえよう。

また今回は、「構造的沖縄差別」という視点から、沖縄戦と現在の沖縄が抱える問題を切り離して考えるのではなく、地続きの問題として考え、戦争の対義語が「平和」ではなく「無関心」であることを強く意識づけるプログラムを立案した。現地において生徒たちは、主体的かつ柔軟に「平和とは何か」という問いを持ち、「がちゆん」でのディスカッションを通して自らの考えを外化しながら⁵³、社会の様々な場所で生起している問題に対して興味・関心を持つようになったといえる⁵⁴。事後学習においては、沖縄戦や基地問題について深めようとする生徒のみならず、民主主義のあり方や貧困問題などより包括的な平和概念に関して学習を深める生徒も多い（資料3）。こうした中、事後学習において「平和教育のあり方」について論文を執筆した生徒を紹介したい。この生徒は、広島在住時に「資料館や原爆ドームに何十回も行ったし、被爆者の方からお話を聞いた」という経験をふまえ、「その学習（筆者注：平和学習）で学んだことがトラウマにならないのか」という意見をネットでよく見か

⁵³ 一方で、注11でも述べた通り、こうした取り組みを一手に引き受けていた「がちゆん」が需要過多により事業停止に至った背景をふまえると、当事者でありながらこうした取り組みを行ってこなかった教員をはじめとした「大人の責任」も問われなければならない。

⁵⁴ 多くの生徒が、修学旅行から帰ってきた後にニュースを見るようになったと述べている。また、公民の2学期期末試験において「あなたはどのようにすれば平和を構築することができると考えるか。あなたの意見を書きなさい」という設問に対して、ほぼ全員が200字以上の論述を行った。さらに解答欄に書ききれずテスト用紙裏面にいたるまで自分自身の意見を書いた生徒が30人以上いたことにも触れておく。

けたとしたうえで「私もその意見は否定できないと思った。なぜなら平和学習をするにあたって必ずグロテスクな画像・動画を見ることになるし、耳をふさぎたくなるようなお話もたくさん聞くことになるからだ」と述べている。こうした記述から、この生徒が当初「平和教育」に対して必ずしも肯定的ではなかったことを読み取ることができる。しかし、修学旅行の経験をもとに、この生徒は次のように続ける。

それ(筆者注:「がちゅん」で出た「小学校低学年から平和教育をすることは良い事なのか」という問い)に対して、班のメンバーは賛成・反対両方の意見を出していた。そして私は、このテーマについてもっとくわしく調べてみたいと思った。(中略)でも私はそれ(筆者注:平和学習)が悪いことだとは思っていない。むしろ戦争を語れる人が減ってきている現代で、どんな形であっても戦争についての記憶を残しておくことができるのはとても大切だと思うからだ。(中略)それ(筆者注:「思い通りにならないときに耐える心」)は平和学習をしていくときに少なからずとも一回はみんなが感じた心ではないのかなと思う。自分がしたいと思って始まったわけでもない戦争に巻き込まれて死んでしまった人、自分と親しい方をたくさん亡くしてしまった人、大ケガをしている人がいても助けることができなかった人。そういう方々のお話をたどっていくことは、中学三年生の私たちにとっても心苦しく耳をふさぎたくなるものだった。そして自分の思いとはかけはなれた生活を送らされていた人々がたくさんいたということを思い知らされた瞬間だった。そういった話を忘れることは許されないし、実際に沖縄に行って学んできた私たちはここで止まっていたはいけないと思う⁵⁵。

この生徒は、自らが小学校時代に平和教育に「耐え」てきた経験が、沖縄修学旅行を通して「悪いこと」ではなく、むしろ「とても大切」なのではないかと述べている。そして、そうした議論が「がちゅん」で行われたことを機に、こうしたテーマで論文を執筆することをこの生徒自身が選択したのである。

つまりこの生徒は、そもそも「平和教育」というものに対して負のイメージを持っていた。しかもそれらのイメージを抱いたまま沖縄に行くことになった。現地で見聞したことは「心苦しく耳をふさぎたくなるもの」だった一方で、「自分の思いとはかけはなれた生活を送らされていた人々がたくさんいたということを思い知らされ」る機会でもあった。そしてそうした思いを「がちゅん」において発表することによって外化した。さらにメンバーとの議論を経たうえで、東京に戻った後に改めて「平和教育のあり方」というテーマで論文を執筆し

⁵⁵ 木村彩乃(中央大学附属中学校 2018 年度 第3 学年)

たいと考え、自己と向き合った。そして、その結論として「私たちはここで止まっていたはいけない」という形で自らの想いを外化させたのである。このようにこの生徒は、小学校の時期に経験した「平和教育」に対する負のイメージをこの修学旅行プログラムを通していったん崩し、新たな「平和教育」のあり方について模索し、この問題について考え続けている。事後学習の指導を通して最も印象に残っているのは、いわゆる「平和教育」をこれまで受けてきた生徒たちが、対話を通じてこのように「脱構築」していく姿だった。

アクティブラーニング型⁵⁶授業の第一人者である溝上（2018）は、「個—共同—個」「内化—外化—内化」の学習サイクルをつくるのがアクティブラーニング型授業のポイントであると指摘する。この生徒は、「個」で感じていた問題を「がちゅん」を通して「共同」で考え、さらに事後学習で「個別」にこの課題と向き合った。この生徒のみならず、生徒は事前学習において、与えられたテーマに関して「個」でまず調べ、班で「共同」して発表を行い、さらに「個」で各教員の講義を受けた。また修学旅行の行程においても、「個」でさまざまなものとの向き合い、それらの問題を「がちゅん」で共有し、さらに事後学習においてそれぞれ「個別」にテーマを設定し、論文を執筆している。また、生徒は事前学習や見学を通して内在化した問題を発表や仲間とのディスカッションを通して外在化し、さらに東京に戻ってきた後は自ら立てた問いに向き合いながら、最後に学習成果を発表するというように内在化と外在化を相互におこなっている。つまり、本修学旅行の事前学習～修学旅行～事後学習という流れは、「アクティブラーニング型授業」として展開されており、こうした学習サイクルの中で意図せずとも生徒たちは、答えのない解に向けての筋道を必死に立てながら論理的に思考し、対話を経て、新たな自己を確立しようとしているということができだろう。また、事後学習においてそれぞれが主体的にテーマを設定し、包括的な平和概念まで発展させつつ、「平和とは何か」を問い直そうとする姿は、生徒一人ひとりが当事者意識を持ったうえで、主体的に「平和で民主的な国家・社会の形成者」になろうとする姿といえるだろう⁵⁷。（川北）

⁵⁶ 溝上（2014）は、「アクティブラーニングが積極的に推進される場合でも授業の中から講義パートが蔑ろにされることは考えられない」としたうえで、講義パートにおいて単に教員の話をはうっと聴くのではなく、これまでの知識や経験と摺り合わせて、新しい知識を位置づけたり、思考したり、感動したり、疑問を憶えたりしながら、残りの時間を知識習得以上の活動や認知プロセスの外化を目指す活動である「アクティブラーニング」を取り入れる「アクティブラーニング型授業」を提唱している。このように溝上は「アクティブラーニング」と「アクティブラーニング型授業」を明確に区分したうえで、教授学習の概念として「講義かアクティブラーニングか」と二項対立的にこれらの是非を問うものではないとしている。

⁵⁷ 北土田（2018）は沖縄県内において、沖縄戦等を取りあげる従来の「直接的平和教育」に対し、沖縄県教育委員会が1993年に「包括的平和教育」の理念を包含した『平和指導教育の手引き』を発行した際に、教職員組合がこれを「官製平和教育」として批判するなど教員間で論争があったことを紹介している。しかしながら、上からの「包括的平和教育」ではなく、生徒が主体的に包括的な平和概念について学びを深めることは、「学習への深いアプローチ（いわゆる deep learning）」ということができるだろう。

むすびにかえて

本論文では、中央大学附属中学校7期生の実践報告をもとに「修学旅行」のあり方に関して再検討を行った。これまで述べてきたとおり、事前学習～修学旅行～事後学習という流れにおいては、生徒たちが新たな知識を体得しつつ、自らの考えを発表することができるような機会を多くつくり、さらに一人ひとりが学びを深めることができるよう学年全体で生徒への指導や助言を行った。最後に第4章第3節で引用した『沖縄問題の当事者は誰か』を執筆した生徒がどのような結論に至ったかを見てみよう。

ここからは僕自身の意見になるが、沖縄のことを考え続ける。他人事としてではなく、自分自身の抱える問題として意識して考え続ける。今までの自分のような考えの人に沖縄問題＝日本の問題であり、自分たちは当事者であることを伝えることは非常に困難なことである。けれども、沖縄問題を当事者として考えてくれる人が一人でも増えてくれることが、問題解決の最短ルートではないだろうか。ニュースを見ると、新聞を読むとき、様々な場面で沖縄問題に触れることがあるだろう。そんな時に当事者として問題について考えることが出来て初めて沖縄問題と真正面から向き合えると僕は思う。

沖縄と向き合い、沖縄を考えるには、生徒のみならず当然のことながら教員にも「覚悟」が必要である。沖縄のみならず、教育現場においても「当事者」として生徒と向き合いつづけている私たちにとって、「覚悟」を持ってこうした修学旅行プログラムを作成し、結果として生徒たちが生き生きと活動しながら、自己と向き合い、自己を乗り越えようと模索する姿に「出会う」ことができたことは、何にも勝る喜びであった。最後にこの修学旅行を通して「出会う」ことができたすべての人々に感謝しつつ、今後も様々な観点から沖縄を考えることができる魅力ある行程やプログラムが開発されることを期待し、筆を置くこととする。

(川北・頓野)

謝辞

2018年度の中学第3学年沖縄修学旅行を立案・実施するにあたり、関係の皆さまに深く感謝いたします。中でも第3学年生徒・保護者の皆さまには、修学旅行の主旨をご理解いただきましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。ならびに、これまでと大きく異なる行程での実施にご対応いただいた株式会社JTB東京多摩支店の皆さま、学年担任教諭をはじめ学校関係者のみなさまにも感謝申し上げます。

参考文献

- 新崎盛暉 2016『日本にとって沖縄とは何か』岩波書店
- 大田昌秀 2006『死者たちは、いまだ眠れず：慰霊の意味を問う』新泉社
- 岡本太郎 2006『沖縄文化論：忘れられた日本』中公文庫
- 川北慧 2011『米軍基地がもたらしたもの：基地の集落（シマ）の民族誌』一橋大学修士学位請求論文
- 北上田源 2018「直接的平和教育と包括的平和教育をめぐる葛藤：沖縄県教委『平和教育指導の手引き』を現場教員はどう受け止めたのか」日本科学者会議第22回総合学術研究集会
- 北村毅 2009『死者たちの戦後史：沖縄戦跡をめぐる人びとの記憶』御茶の水書房
- 熊本博之 2005「「辺野古」から辺野古へ」『軍縮地球市民』第2号、明治大学軍縮平和研究所
- 熊本博之 2009『迷惑施設建設問題の構造と地域社会：「不正義の連鎖」を生み出す構造的要因の析出』早稲田大学博士学位請求論文
- 行田稔彦 2018「いまこそ沖縄：沖縄を学ぶ子どもたち—沖縄とつながり希望を紡ぐ」日本科学者会議第22回総合学術研究集会
- 古賀徳子 2018「ひめゆり平和祈念資料館におけるメモリーウォークの取り組み」日本科学者会議第22回総合学術研究集会
- 里井洋一 2018「社会科教育と沖縄の平和教育史」星野英一ら編著『沖縄平和論のアジェンダ』法律文化社
- 下河辺美知子 2006『トラウマの声を聞く：共同体の記憶と歴史の未来』みすず書房
- 下嶋哲郎 2015『平和は「退屈」ですか：元ひめゆり学徒と若者たちの500日』岩波書店
- 反町祐文 2017「「ゆんたく」で溝を埋める修学旅行生と平和学習」『Journalism』2017年8月号、朝日新聞社
- 高嶋伸欣 2012「日本の戦後史をかえつつある沖縄への期待：教材開発などの体験から得たものを中心に」日本平和学会2012年度春季研究大会
- 高橋順子 2010「沖縄修学旅行の変遷」勝方＝稲福恵子ら編著『沖縄学入門』昭和堂
- 高橋順子 2017「沖縄戦学習に求められる多面性の変容：朝日新聞社「知る沖縄戦」の補助教材としての「適切性／不適切性」をめぐる」『琉球・沖縄研究』第5号、早稲田大学琉球・沖縄研究所
- 高橋哲哉 1999『戦後責任論』講談社
- 竹内久顕 2011『平和教育を問い直す：次世代への批判的継承』法律文化社
- 多田治 2004『沖縄イメージの誕生：青い海のカルチュラル・スタディーズ』東洋経済新報社
- 内閣府HP「社会意識に関する世論調査」<https://survey.gov-online.go.jp/index-sha.html> (2019年1月7日閲覧)

ノーマ・フィールド 2018『いま、〈平和〉を本気で語るには』岩波書店

フォルジュ, ジャン＝F 2000『21世紀の子どもたちにアウシュヴィッツをいかに教えるか?』

高橋武智訳、作品社

古市憲寿 2015『誰も戦争を教えられない』講談社

本間玖美子 2010「子どもの自主・自立性に関わる暗闇体験」『発育教育研究』20、日本発育発達学会

溝上慎一 2014『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂

溝上慎一 2018『アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性』東信堂

目取真俊 2005『沖縄「戦後」ゼロ年』日本放送出版協会

安井俊夫 2008『戦争と平和の学び方：特攻隊からイラク戦争まで』明石書店

山口剛史 2013『沖縄戦を中心とした平和教育教材開発研究報告書』2009年～2012年科学研究費補助金（若手研究（B））研究成果報告書

山口剛史 2018「沖縄から考える平和教育実践の課題」星野英一ら編著『沖縄平和論のアジェンダ』法律文化社

吉田司 1993『ひめゆり忠臣蔵』太田出版

<資料1> 事前学習のテーマ一覧

〔自然〕サンゴ／ジュゴン／さとうきび／やんばるの森

〔文化〕沖縄のこぼ／沖縄の信仰・エイサー／沖縄の芸能／沖縄の食文化／豚と沖縄

〔歴史〕薩摩侵攻以前の沖縄／薩摩侵攻～琉球処分までの沖縄／琉球処分～戦前の沖縄／沖縄戦で使われた武器／集団自決（強制集団死）／終戦～日本復帰までの沖縄／日本復帰～現代の沖縄／沖縄の経済（雇用）

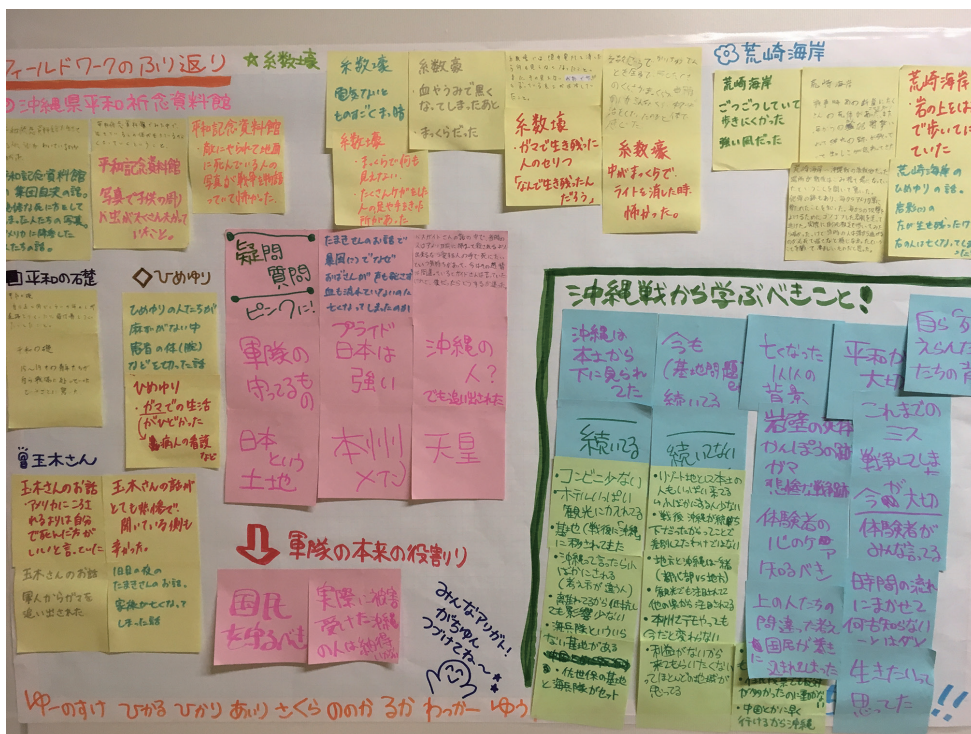
〔見学地〕平和の礎／各都道府県の慰霊塔・碑／摩文仁の丘・牛島満／健児之塔（鉄血勤皇隊）／糸数壕（アブチラガマ）／ひめゆり学徒隊・荒崎海岸／ムーンビーチ／辺野古（キャンプ・シュワブ）／佐喜真美術館／沖縄国際大学／普天間基地（米軍海兵隊）／嘉手納基地

<資料2> 事後学習のテーマの一例

戦没者と平和の礎／沖縄問題の当事者とは誰か／沖縄の固有種たちを未来へ／戦争体験を語り継ぐ必要性／「子どもの貧困」：解決策を考える／沖縄の交通の昔と今：米軍の影響はあるのか／沖縄に軍事基地は必要なのか／沖縄戦で亡くなった方の遺族は今／特攻隊について／慰霊とは何か：都道府県の慰霊碑・碑から考える／沖縄の基地と海兵隊／普天間基地の移設による住民の対立：政治的要因／戦後をどう生きるか／海兵隊の暴力と向き合う／将来の

沖縄へ：過去を乗り越え将来を見据える沖縄／ジュゴンと辺野古：平和について／沖縄戦とひめゆり、糸数壕／PTSD：トラウマとの向き合い方／基地問題に対して自分ができること／沖縄の経済：盛んな観光業と深刻な貧困問題／美しいサンゴを守るために／沖縄への向き合い方／戦争はもう完全に終わったのか／沖縄戦に関わった人々の証言・遺書／エイサーの歴史に迫る！／長寿でなくなる沖縄／「終戦記念日」とは何か：戦争はいつ終わった？／基地を分散させることはできるのか／教科書から見る歴史認識の違い／沖縄と民主主義／何が戦争孤児を生き抜かせたのか／米軍ヘリの事故はなぜ相次いでいるのか／「沖縄音楽」に学ぶ現代音楽のあり方について／沖縄の特産物を活かした沖縄のための観光・経済発展とは

＜資料 4＞ 「がちゅん」で用いた模造紙



<事前学習>

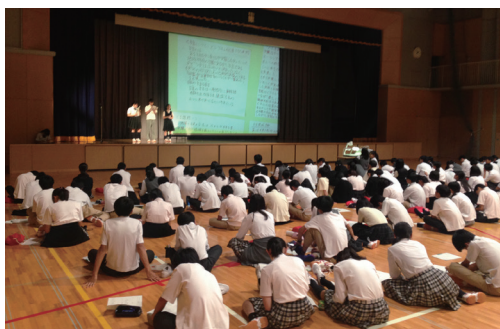


写真 1 (事前学習発表会)



写真 2 (事前学習発表会)

< 1 日目 >



写真 3 (平和の礎)



写真 4 (健児之塔)



写真 5 (玉木さんの講話)



写真 6 (講話を聴く生徒)

< 2 日目 >



写真 7 (アブチラガマ)



写真 8 (荒崎海岸)



写真 9 (がちゅん)



写真 10 (がちゅん)



写真 11 (がちゅん)



写真 12 (がちゅん)

< 3 日目 >



写真 13 (辺野古での講話)



写真 14 (大浦湾でシーカヤック)



写真 15 (ジュゴンの見える丘)



写真 16 (恩納村ふれあい体験センターでエイサー)

< 4 日 目 >



写真 17 (佐喜眞館長による解説)



写真 18 (佐藤教授による普天間基地解説)

< 事後学習 >



写真 19 (事後学習)



写真 20 (事後学習)



写真 21 (沖縄国際大学屋上にて学年集合写真)